

11

625

中西貞行著作

演劇  
脚本

十三鐘  
組懸柳

妹脊山婦女庭訓

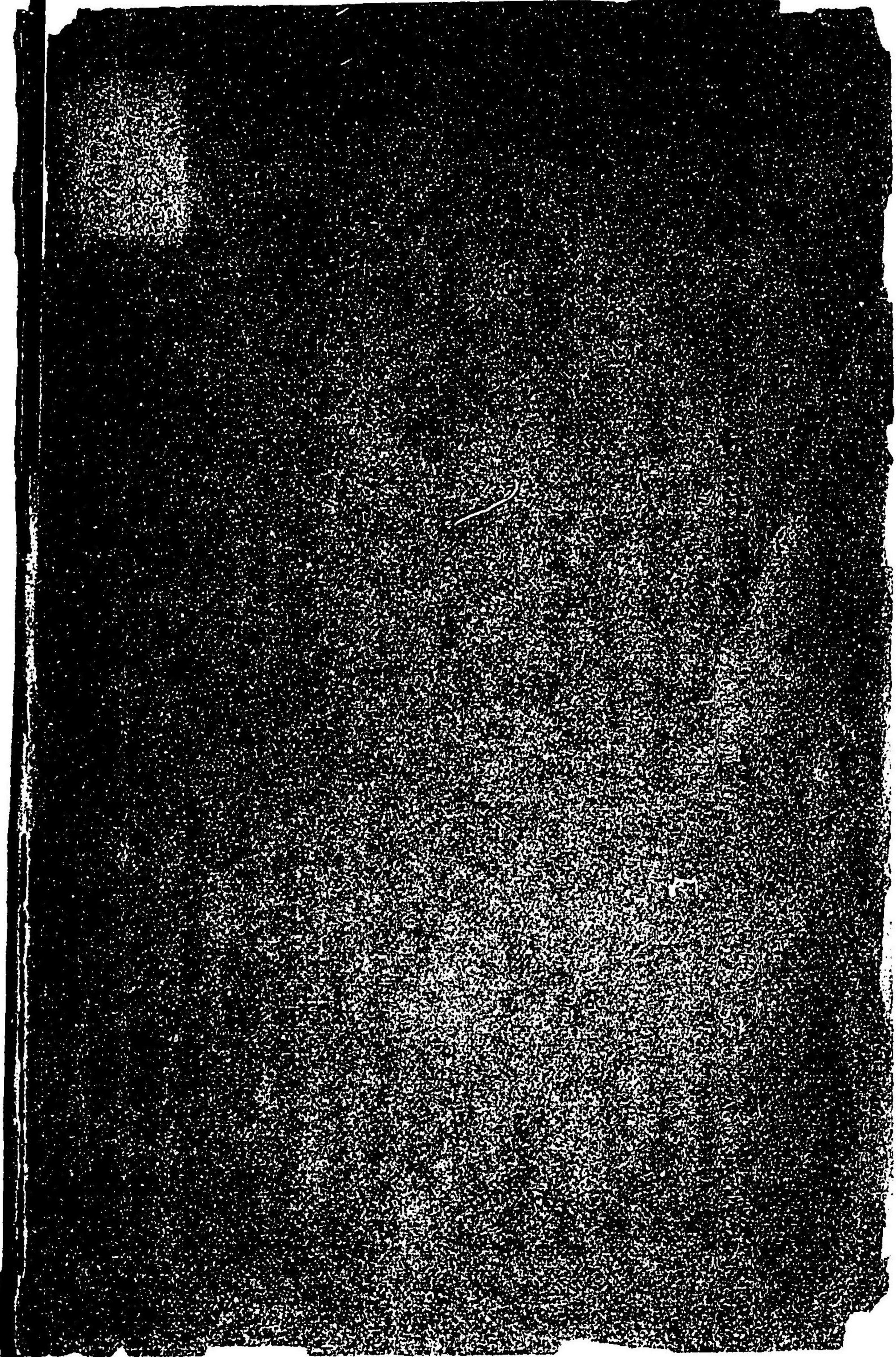
自序幕  
至大詰



持11  
625

脚演本劇 妹脊山婦女庭訓

序	序	御殿の場
二幕目切	蝦夷館殺しの場	
二幕目切	鹿殺しの場	
三幕目切	獵人芝六住家の場	
三幕目切	花渡しの場	
三幕目切	妹山脊山吉野川の場	
四幕目切	杉酒屋の場	
大詰	道行戀の亭環の場	
	新御殿の場	





演劇妹脊山婦女庭訓

序幕御殿の場

役名

一大淵隼人	一采女の方
一英藏人	一蘇我の蝦夷
一荒牧彌藤太	一中納言行主
一宮越玄蕃	一鎌足大臣
	一並公家
	一仕丁

造物通り高足の二重真中階欄干附正面御簾都て御殿の体上の方に蝦夷下の方行主下の段に藏人玄蕃双方に並び公家仕丁有のさり代にて幕明く淨るリ奈良の都の冬木立左には蘇我の蝦夷右座には安倍中納言行主庭上の勳臣には英藏人天晴蝦夷が家臣宮越玄蕃其外有司威儀を正して伺公有る蝦夷寛然と上笏し蝦夷改め云には及ねど日々の政務老臣の此蝦夷悉く是を計らふ是といふも忤入鹿は病床に引籠る又政道の力とあるべき鎌足は假染にも虚病を構へ事を捨て引込る了簡其意を得ざる故是非今日は鎌足を呼出し事を糺すに一決せり夫故先達て鎌足に參殿の使を立しが玄蕃鎌足は未だ參殿致さぬか玄蕃御意の通り再三御召

しの使を出し升たれ共追附け夫へと斗り今に參殿はムり升ぬ蝦召に背くは不埒千萬淨るリふのれが邪智を押隠し讒ら言ど是非も無き中納言進出行主政務を重んずる蝦夷公のお詞去る事乍ら忠勤正しき鎌足大臣何を以て野心あらん再三思慮を廻らされ必らず寵忽なき様の御賢慮の程あらまほし玄アイヤく行主殿主人蝦夷は老臣の勞もいとほす忠勤一途よ思召を寵忽の詞とみつしやるのる連歌蹴鞠に日を暮し政務を知らぬ馬鹿者と同じ様に思召貴公様が近頃寵忽かと存じ升る藏人たまれ玄蕃堂上の論談は君子の争ひ陪臣のろち達風情が舌頭に掛るは恐れ有る過言千萬扣へて居やれ玄イヤ又者でも陪臣でも理非を糺すに遠慮はない過言咎める其方が過言今一言いつて見よ舌の根切て切り下るぞ藏人イヤ匹夫の過言慮外なやつ淨るリ既に斯うよと互ひの争ひ蝦夷聲かけ蝦兩人待て武臣とは言乍ら國民の非道も糺す身を以て若輩者の玄蕃を相人に藏人論は無益玄蕃も扣へておれ玄じやと申して蝦まだく申か無禮千萬淨るリ制する折のら奥深き帳裏を出る采女の方蝦夷大臣に打向ひ采女御上意皆々ハア、采鎌足大臣に野心ありと蝦夷大臣の詞人を損せぬ行主殿の今の争ひ君子互ひに論に及ぶも皆天下の爲めなれば何れを何れ共別け難し只此上と鎌足大臣を招き寄せ事明白に糺すべしとの御上意蝦夷様行主様父上を召升して何事も御聞被成て下さり升せいなア淨るリ打しめりのたまへば蝦夷大臣居丈高蝦ソレ一刻



も早く鎌足を召寄せよと蕃早く、五畏つてムリ升る「ト立上る」戸家まで「鎌足參上」五か聞われ升たか、淨參上と案内して入來る鎌足大臣、行是は、鎌鎌足公此程の事は、お病ひの處身不肖の某貴公に代つて蝦夷殿の御政務のお相手先は早速の御參殿安堵致した、サ是へ、鎌鎌足「是は、御御懇意の御挨拶矢張り其儘、淨互ひの挨拶中納言鎌足に座を譲り玉へば押直つて蝦夷に向ひ、鎌今日某改めて召さるゝ事何事やらん、淨聞まほし、と宣給へば采女の方進み出、采サア其様子は父上久々の御病ひ參殿無き事を諸卿野心ありとの疑ひ忠勤厚き父上様聊か曲れるお心はあるまじありの儘に御申譯○イヤ速に申開かるべしとの御上意、謙ハアコハ思ひ寄らず愚臣病床に引籠し事聊か野心あらんや夫に何ぞや諸卿の疑念とは、殿イヤコレ、鎌鎌足御邊に某は政道を助合水魚の交り厚ければ掟を糺すに猶遠慮はならぬそや、鎌如何にも左右の職に任する貴卿と某行ふ所の政務は金櫃摘要の古格を以て取計らへば聊か私あらんや何を以てか某を、殿イヤ疑はにやなり升せんイヤすんど疑はにやならぬてや、鎌シテ疑念の元はなア、殿見せ升うかお目にかけてようかヤア、彌彌藤治早參れ、彌彌藤治「ハア、淨ハッ」と答へて荒巻彌藤治一ツの箱を携へ出、彌彌仰せ付られし一品持參仕つてムリ升る、淨お前に直し引下る、殿鎌足殿イヤ鎌足御身に見せるといふは是じやてや、鎌怪しい箱を某に見よとは、殿子細は斯の通り「ト箱を

あけ鎌と願書を出して、殿五日以前春日の社壇へ何者共知れず此箱を奉納内には鎌一挺は此願書、鎌願書とは何男子誕生平天下と書しは、殿則れ身の息女是なる采女男子だに誕生あらばと平天下と書たるは四海を乗取る心の祈願鎌の則鎌足家の寶外に類のなき重寶其影の鎌をあらたに打たせ奉納したは餘人でないわい知らぬと隠さつしやるなイヤサ覺へ無とはいはれまい返答召れ何と、淨思ひ寄らぬ印の鎌、鎌スリヤ其鎌に願書を添へ春日の社へ奉納し、五御殿守護はどこへやら、彌野心を挟む大悪人、謙當時賢人たる鎌足公、行餘もやと思へど、鎌家に傳はる鎌の片しが、行アノ願書、謙行「ハテ怪しやなア、淨數多の公卿あきれ果口を閉てぞ居たりける鎌足大臣思慮を定め、鎌此身に取て曾て覺なければども目のあたり疑しき願の鎌、殿但し言譯があるか、鎌サア正敷反逆の者あつて我を罪に落さん結構此惡黨を見出す迄は所詮申譯して詮なき事、殿スリヤ言譯ないじやまで、鎌我は暫く謹慎して何れへなりとも塾居せん、五夫がよい覺悟足元のおかい内きり、鎌お出被成い、殿「五支番彌藤治鎌足を門前へ送り出せ、二ハア、○御意じやお立被成、采エ、ろんなら父上様是申せうぞ言譯被成て下さり升せいのう、淨「鎌繩り玉へば行主卿、行御親子のお別お歎きは去る事乍ら仮にも科人と成り玉ふ上は殿中の交りは叶とぬサア古へより斯る例しは儘ある事罪無うして配所の月といへば御身に曇りなき申譯さへ立ば追付目出度御



親子の對面先々奥へお入被成い 淨るり「歎きをなだむる中納言耳にも掛す鎌足大臣 鎌千  
 早振神に祈りの繁ければなごか都へ歸らざらまし 淨るり「静々歩み出玉へば蝦夷を始め數  
 多の諸卿武勇たゆまめ天晴も 藏罪なきお身に無實を受け退出被成るゝお心の内憚り乍ら  
 推量仕りお痛はしう存じ升る「ト袖を扣へて云ふ鎌足思入あつて」 鎌昔齊の國に無蓋とい  
 ひし女あり其形醜し然れども賢女にして政衰ふるを悲み表を作つて王を諫むる故に國治  
 り民安く其名を千歳の今に輝せし例し有り 藏又周の幽王の代に褒似と云し美女一度笑ふ  
 て國を傾くゝるが故に今に其名を聞く者は憎む 鎌善惡邪止は無蓋と褒似其心の趣く所  
 に寄るなア丁度我娘采女も先其如し 藏スリヤ御息女采女の方様故 鎌燒野の雉子夜るの  
 鶴 藏貴賤に限らず子に迷ふ親心 鎌空を翔る翼 藏地を走る畜類迄 鎌迷ふは恩愛「ト  
 蝦夷の方を見る藏人思入」 藏御尤〇慈悲の目に憎しと思ふ者もあし 鎌科ある者は猶怒  
 れなり〇方々去らば 藏こま言いはすと 藏彌早くムれ 淨るり「肩臂張て歸館の警固銳利  
 を隠せる鎌足は心謀る七重八重 行何れも退出く 淨るり「操變らぬ君が代の「ト大三  
 重に成り鎌足を玄番彌藤治送り這入る藏人思入蝦夷行主目禮宜敷幕

序 切 蝦夷館殺しの場 役 名

- 一犬 淵 隼 人 一八 乘 寺 一入 鹿 大臣
- 一官 越 玄 番 一文 聖 寺 一仕 丁 四人
- 一官 女 吳 羽 一中 納 言 行 主 一素袍侍 二人
- 一同 一 久 我 之 助 一官 女 二人
- 一め ど の 方 一英 藏 人
- 一め の と 青 柳 一智 我 の 蝦 夷

造物二重惣金襴雪降りる体上の方家体金網のかりる仕掛け有り蝦夷上段に火鉢にあたり酒  
 呑み居る官女二人酌して居る玄番隼人高股立にて庭に雪こかし色々の雪人形を拵らへ居る  
 見得にて幕開く 淨照瑠世の人は三條の御所と持囃す蘇我の蝦夷が廣館雪見の亭を設けの  
 座女小姓を肉屏風窓りに透間中庭の蔭をころばすつかね雪つめたさ堪らへ主命の重き役目  
 と宮越玄番 玄番「我君雪見の御遊のお慰みの爲め雪人形の束帶姿御酒宴の一興かと存じ奉  
 る隼人「拙者めが工夫をこらせし雪の兎手際の程御上覽下さり升せう「ト銘々臺に乗せ出す」  
 吳羽「あつてもよい細工でムリ升なア 志きり「取り別け此兎の耳と善い思ひ付でムリ升る吳」  
 イエ〜兎の耳を枇杷の葉でするとは古ひ思付是迄なんばもあるかた珍らしいの玄番殿の  
 細工の人形束帶姿とは新らしいじやないかいなア志きり「追付隠居様が大臣の御筆がしらに



お成り被成升と云ふ瑞相じやわいのう 吳「さつても氣の付た玄番様の思ひ付をきり」ヨウ雪  
 人形の親玉様 淨「はめそやされて宮越玄番 玄「ろりや女中方のおつしやる通り私が様な思  
 ひ付も根が遊興乍ら一寸するてんがうが此通り我君を壽く雪人形自慢ではないが此玄番が  
 性根でゐる 淨「おとあげなくも出かし顔蝦夷につまど打笑ひ 蝦夷「コリヤ玄番めが出うし  
 おつた雪人形大臣の頭に立つ前表とは通れの秀句祝して酌せよ玄番近うく 玄「ハア、御  
 免下さり升せ」ト上へ通る」 淨「イヤ酌とれと餘念なく廻る盃養老の尽ぬ泉の底とかと案内  
 もなく廣庭傳ひ入り来る二人の僧 彌「待てく 兩僧何用有て罷り通る御前なるぞ下れく  
 文聖寺「イヤ我々は御領分に住職する文聖寺と申すもの 八乗寺「愚僧は八乗寺と申す者でムリ  
 升 集人「其兩僧が何故お召しもなきに罷出たぞ 玄「憚り乍ら佛法歸依の入鹿様の行法滿願  
 の日でムリ升故拜禮致さん爲罷通り升る」ト行うとする」 彌「待ちおらういらざる入鹿が佛  
 三昧はふのれらが勧めたなア 玄「イヤ全く左様では 彌「だまりおらう忝なくも日の本の神  
 明守護有る我が館の奥の亭へ通らんなどいは身の程知らぬ賣僧めら悪く膝を踏込むと枝骨  
 切て切り下るぞ 八「ア、お赦され升せく 御子息の入鹿様が佛法を歸依被成升ればおまへ  
 様は猶の事と思ひの外其様に佛嫌ひで有うとは夢三寶存じ升せぬから唯今の慮外ノウ文聖  
 寺 玄「夫々如何様當世は親仁の夜歩き息子の勘當と云ふ譬に氣の付なんだは愚僧共が不調

法眞平御免下さり升う」ト手を合し拜み泣くこなし」 蝦「エ、思々しいはへづらなまなか兩  
 眼が見へる故役にも立ぬ佛三昧暗き冥途の佛法を歸依するが望みならば兩人共に目をくり  
 出し盲目にしてぼつ拂らへ 玄「筆「畏つてムリ升○兩人共に覺悟せい」ト立掛る」 八「アモシ  
 く私共が目をつて盲目にするとはあんまりひどい思召し附き 玄「俗人どもころ後生を  
 願へ愚僧共は少しも後生願ふ心はムリ升せぬ 八「此様な衣を着て佛様をおだてるのも妻子  
 眷屬を養ふ爲 玄「私共は暗き冥途に赴く事はお赦しなされて下さり升せ二人「御慈悲でムリ  
 升る」ト泣く」 玄「エ、思々しい又拜みおるわい我君の御意の通り眼玉を出してどう盲にす  
 るこ 八「いかに佛がお嫌ひじやて、 玄「兩眼明かなる私共を 八「盲にせいとは 玄「ア、申  
 しどうぞく」ト住吉海道の盲の眞似して云ふ」 玄「喧ましいわい願叩くと眼斗りじやない  
 頼桁も切りさぐるぞ 玄「彌「兩人共に覺悟せい」ト刀に手を掛る」 青柳「待つたく御兩人マ  
 アくお待ち被成升せい」ト奥より出る」 彌「我君の御意に因て眼をくり出すすくようめ  
 を待てとお止めさつしやるは 青「姫君の御意 彌「何と 青「始終の様子を御殿よりお聞遊  
 したる姫君のお歎○憚り乍ら仮りにも佛体を受けし人間五体不足にして佛にならずと申升  
 るのに満足な人間を片輪にせうとはあんまりな情けない御思召立どうぞ御堪忍被成て其儘  
 にお助け被成ておやり被成て下さり升せいとアイ姫君様のお頼みでムリ升る 彌「スリヤ今



の様子を橋姫が聞たか 貴、ハイ直にお願い申したけれど何や角やのお心遣ひでお癢が起つて○マア夫で私に参つてお願い申てくれとの御口上でムリ升る 賢、エ、女と云ふ者は氣の細い何是しきの事に癢もへちまも入らぬてハテ左程姫が氣に障はる事ならば 貴、御了簡遊れて 賢、助けてくれたい者なれど一ツ且此蝦夷が言出した一言返しては旋が立ぬわい 玄、叶はぬか願ひすつ込で居さつしやれ 貴、成程我君の御意を背いては 玄、世人の嘲り此以後旋が立ち升せぬぞ 貴、サア其旋も立ち姫君のお願いも叶ふ様に了簡ハアノお二人の御出家にめんないちぢりを掛けて此場よりお返へし被成さへすれば盲目にせうとおつしやつた我君様の御旋も立ち又助けよとおつしやつた姫君様のお願いも立ちさうな者と憚り乍ら存じ升る 玄、スリヤ此兩人の賣僧共にめんないちぢりを掛けて追つ拂へどおア 貴、サア斯様申升るも則ち姫君のお願いでムリ升る 玄、ハテ何とせう眼をくれと有るもお主なり又くるなど有もお主なり兎角私の斗らいにはならぬ我君如何が仕り升せうなア 賢、ハ、ハ、一旦身が言出した詞も背かすめんない千鳥を掛けて追つ拂へどはコリヤ出かした如何にも夫で旋は立と云ふもの 貴、そんなら御了簡遊ばされて下さり升るか 賢、如何にも 貴、エ、有難うムリ升る此通り申上げたら姫君様も賑お悦びでムリ升う 賢、一間へ立て入りにける 賢、併し眼をくるは餘り殺生逆もの事に兩人共に三衣を剣で盲角力を取らして樂まん玄番計らへく

玄、畏つてムリ升る 賢、如何様めんない千鳥を掛け目くらん坊うの座頭角力どの倔強のお慰み 玄、サア兩人共に立て「ト二人を裸にしてめんない千鳥をかける」 玄、年、御前のお慰みじや兩人共早々角刀を始めく「ト雌子に成り盲角力のこなし玄番行司のこなしにて兩人をよき所に直し」 玄、西は八乗寺く 玄、年、東は文聖寺く「ト色々あつておかしき身ぶりにて角力に成る何れも工夫あるべし」 賢、ハア、一興く「最早用ない娑婆塞げめら其儘」 兩人「うせう 淨、門外へさして行く折柄表の廣間口取次の青侍罷出て 侍、申上する大判事の子息清船殿お召に因て参上仕つてムリ升る 賢、待ち兼た是へ通せ 侍、ハア、「ト引返して這入り直ぐに戸家の内にて」 侍、久我之助清船殿御前へお通り被成い 賢、呼はる聲に入り來る久我之助器量骨柄武氣備はる中に優美の長上下禮義正敷手をつかへ 久我之助御召に因て久我之助只今参上仕つてムリ升る 賢、ア、珍らしや久我之助存する仔細有て使を立しに早速の入來祝着く、禿るす近う 久、ハア、御召し成さる御用のしなり「ト是に居直り」 賢、別義でもない采女の方は鎌足が娘此頃御殿を出脱け入水せしとの風聞誠に疑敷取沙汰もあれば實否を糾さん爲其方は采女が附人サア様子が聞たい實説か何と 久、ハア、仰せの通り相違なし采女の御方には世を果敢なく思ひ取り猿澤の池へ入水ありしと聞くより早く駈け付て見れば空敷御尊該是非に及ばぬ野邊のいとなみなし奉れども侍づる此身の誤りは



悔に甲斐もなき跡の御供養の申も漸く三日を過ぎざる内ね尋ねに預り面目なき次第鎌足公の御愁傷察しやられてお痛はしく存じ奉り升る。蝦「さころくすりや鎌足の塾居を悲しみ捨身せしに相違はないか。久「毛頭偽りはムり升せぬ。蝦「ハア浅間敷采女が成り行其方附人の落度となつて親大判事にも勘當受けしとなア。久「御意の通り父が不興も此身の誤り今更悔に甲斐なき此身の不仕合せ。蝦「其勘當の身を以ていゝめしき禮服を着飾り我目通りへ出たる心底は。久「か尤の御不審親も無し主人もなき獨立の此身を幸ひ蝦夷公の御召に隨ひ御奉公仕り度存じ奉り尊君を敬ひ奉るしるし禮服でムり升る。海「心よ探りの一思案誠しやかに相述べば。蝦「ホウ扱は此蝦夷に奉公の望みとな。久「あはれ御家來の數に御加へ下さらば生前の御思いう斗りか大慶に存じ升る。蝦「チ、若輩者に似合ぬ健氣の望みでかしたく併しうちが父大判事に勘當を赦させ其上父子共に臣下となさんが父大判事は所存如何で有う。久「御意返し奉るは恐れ乍ら親大判事が氣質は善惡共に鐵石の魂いか程申とも勘當赦さず元より二君へは仕へぬ心底。蝦「サア其口ごはさ大判事を威勢を以て幕下に隨へて見せう。久「さうならばお手柄如何様とも親清澄さへ得心致さば此上もなき仕合せ所詮私一人の奉公が相叶はずば先づ今日は退出致さん。海「徐々歩む向ふの方兼て言附け置たりけん。ト玄蕃隼人鎧を持ってツカくと出る。兩人「動くな。久「是は。兩人「御上意。久「何上意とぞ。兩人「覺悟

せい。ト双方より突掛り烈しき立廻り有てしやんと止て。久「此久我之助は何科有て斯様に被成るな。玄「チ、不審尤科なき其方に斯く計ひしは武藝の試み。ト又掛るを立廻りにて止め。久「イヤ斯様お事では參らぬざわくせすと扣へてムれ。蝦「チ、若輩者に似合ぬ連れの働き手の内見へた兩人引け。兩人「ハア、ト扣へる。久「扱は若輩者の私故武藝の試みとなア。玄「如何にも汝が油斷を見て。○カウ。ト又切て掛る立廻り。海「跡へしさつて兩人が互も切込む刃と刃庭の飛び石エイウンと受れば御殿の天井より怪しく下る鐵網に清舟屹度眼を配り。久「ハテ再三の試みコリヤ眞劍のお相手かお望みならば兎も角。海「付入鋤元しつかと押へ。玄「イヤ中々お手際。兩人「驚き入り升てムる卒爾は御免イザお引被成い。海「双方の刀は鞘に飛石も元へ直せば御殿の網棟木遙に隠れけり久我之助さあらぬ体。久「蝦夷公のお試みの切先を受け止めた今の飛石地を離るゝを相圖に下る鐵網元の如くに石を直せば網も隠れて其体もなしハテ適れの御要害でムる。蝦「サア大切の此要害を見せ置も其方は身内同然と思ふ故。久「スリヤ此久我之助を。蝦「他事なき印よく。怨望に思へばこそ他言せぬぞちが心底を見抜し故じやわい。久「是は痛み入御挨拶某連も武士のはし只今の如きお手配りは急度〇見届ても他言の致さぬ御両所只今は御苦勞。ト二人咳拂して顔をろむける。久「か氣遣ひ被成な蝦夷公。蝦「再會は又重ねて。久「か去らば。蝦「去らば。海「左右に目配り悠々と



表をさして立歸る跡に蝦夷は溜息の一間の襖押明けて出賜ふめどの方「トめどの方青柳付  
 添ひ出て」めど「今日は雪景色を御遊覧の御酒宴に似合ざる鉦の音かのづと心もしめやか  
 なお願ひ乍ら夫入鹿大臣には秋の終りの頃よりも徒らに佛の道よ入賜ひ奥の亭に引籠り一  
 ツの棺を地内に納め入定せんと願ひの日數も丁度今日が百日め入相の鐘を限りよ定に入  
 り賜ふとは何に譬ん此身の悲しさ自が心根を少しは御推量なされて舅様のお情けにはお諫  
 め被成て下さり升せ」海「涙先立ち歎ち言　青柳御臺様のお願ひではムり升せぬ現在兄御様  
 のお身の上をお願ひ被成て此程よりお枕も上らぬ姫君様の御心根もお痛しうムり升ればめ  
 どの方様のお願ひの通り入鹿様の御遁世をお諫め遊ばされ　めど「御酒宴のなかばへ申上る  
 も氣の毒乍ら今日に迫つたお願ひ　青「申御慈悲でムり升る　めど「お情けでムり升る是申舅  
 御様　海「一ツ思ひを二人して云ふを打消す父大臣　蝦「喧しい又しても」入鹿めが取沙汰  
 ・當時此蝦夷が威勢をつげば何不足なき榮花の身を振り捨て佛法と云ふ天竺外道の術に歸依  
 し奥庭へ引籠り晝夜を別たす稱名讀誦する馬鹿者所詮此世に存命してからが益もなき悴め  
 土中へなりと定になりとも入り次第にして置きやれ　兩人「エ、　蝦「又最前から鉦鼓の音エ  
 うるさい思はわしい不孝者め嫁も重て言出してたもるなや青柳橘姫にも役にも立ぬ兄が  
 事を苦にやんで鬱陶しい病氣の床に斗りそつ込で居すどちつと爰へ出て雪でも詠めて鬱散

せいと云へ　青「ハイ　蝦「サア二人りともに行ぬか　めど「アイ「ト泣く」　蝦「エ、まだ」不  
 吉のはへづら酒宴の妨げするか　めど「勿体ないなんのマア御遊興の妨げ致し升う　蝦「サア  
 其泣聲が嫌ひじやわい　めど「イエ」モウ」泣きも致し升せぬ涙もこぼし升せぬ　海「御  
 免るされてと袖に解け行まはり雪思ひは胸に氷るらん宮越玄蕃引取て　青「是はしたり御臺  
 様青柳殿迄同じ様に不孝な若殿のお身の上をねつしやる程大殿のお氣にさはるモウ」頓  
 と入鹿様の取沙汰は是限りに被成てサア　海「御機嫌直しに別殿にて改めて御酒宴女中方い  
 つもの通り今様の一さし古めかしい管弦樂器は取置て面白う三味線で君の機嫌を引立」  
 サア騒げ」紅「アイ」ををり「サア」是らわつさりと二上り三下りの新歌を引たり  
 諷たり吳羽「速れ引にせうわいおア　青「何でもだんないわつさりと騒いだ」イサ我君にハ  
 半、玄「先お入り下さり升う　蝦「チ、玄蕃でかしたどうでも玄蕃でなければ夜が明けぬ穢らは  
 しいはへづらの居間をかへて酒宴せん玄蕃華人奥へ来い「ト皆々這入る跡合方」　海「怒りの  
 風も尻の楯腰元共がとり」に一間へ伴ひ入りける　青「申々御臺様所詮わの御氣質の大  
 殿様かつしやつた迎お聞入はムり升まいめど「じやと云ふて此儘捨て置ては夫のお身の上か  
 青「サア其お身の上のお願ひは御病氣乍らもお姫様をお供して入鹿様の御入定をおとめ下  
 さり升よふ幾橋のお局様へお願ひ申て見やうと存じ升わいなア　めど「チ、優しいよう氣が



付升た身にかゝらぬ其方衆さへ其様に思ふて下さるのに聞へ升せぬは入鹿様今日を限りの入定とは生別れの自らが身をちつと御推量被成て下さり升たがよいわいなア同じ御殿に有り乍ら暇乞にお顔を願ふ事さへ叶はぬは築山の門を閉ぢ物云ひかはす事さへ叶はぬ淨泣てばかりあり升と咽ぶ涙を友千鳥同じ翼に露時雨凌ぐ方なき思ひなり貴ア、お氣の弱ひ何もか案じ被成るゝ事はムリ升せぬ日暮といふても聞のない事直に姫君のお供をして参じ升せう めと「夫はいかひ太義じやのう 貴ナ、勿体ない事おつしやれ めと「そんなら必す吉左右を 貴追付けお聞せ申し升せう めと「併し舅御のお耳へ入らぬやう 貴密かよ裏道から 淨互ひに力ら附合ふて御殿を差て急ぎ行跡見送りてめどの方「ト合方になり」めと「あの青柳のしほらしい能う力を附てたもつたのう橘姫のお供してお願ひ申し上るからばよもや御承引のない事あるまいと思へども照る日の曇る浮世の中嬉しい便り聞く迄は此胸が休まらぬひよつと願ひも仇に叶はずば此身は何と成らうぞいなア 淨「便り少き身の上は諦め兼し胸の内「ト合方に成り」めと「假令願ひが叶ふても心變せぬ夫の氣質夫を知りつゝ頼みまも妹御の深切を破らぬ誠 淨「兎や角と思ひつゝけて庭に下り木草の枯れ葉詠めても猶彌増しの無常心 めと「夫の命も今日限りと思廻せば思ふ程果敢ない浮世現在の縁しころ薄くともせめて未來は一つ蓮雪はすゝくと云ふ文字は時よ取て幸ひの舅御の悪

名もすゝと爲さうじやく 淨「涙は胸に降り積る雪花集めかき寄て凍る手先も後生の爲束ね丸めて五輪の形 めと「現在の姓名は入鹿大臣頓生菩提 淨「心の回向せぐり来る聲も憚るしめ泣に哀れ果敢なき風情なり夫に引替へ奥の間は地下を寫しの三味線になまめく歌の聲さへて「トしつばりとした歌」めと「管弦舞樂に引替へて地下の遊びの浮世歌いかに親御のこふげじやとて現在のお子と云ひ嫁と云ひ今日を限りの命ぞと悲しむ事を聞捨てあんまりむごいお胴慾でムリ升わいなア「ト又めりやす歌に成り色々思入あつて末に好みの合方」めと「エ、情ない時も時折も折雪見酒どころかいなアアノ鉦の打納めが入鹿様の御臨終夫を先立何樂み共に夫の未來の道連れ 淨「上着を脱げば墨染のけさゝ積る廣庭の雪に座をしめ合掌し降り積む雪は取も直さず氷の地獄此儘爰に埋れて此身を果すがせめて夫へ心の誓ひ淨「死なんと誓ふ貞心は天に通じて降りしきる膝も袂も白砂に色香盛りの黒髪を八十の姥と疑はる恩愛血筋に屈詫せぬ蝦夷大臣一間を出で 淨「嫁めどの方まだろくに泣て居るかハテ扱くごくにも立ぬ馬鹿者め入鹿の事を苦に病で物好きな雪なぶりモウ打やつて爰へ来て火にあたりやれ めと「アノ胴慾な事おつしやり升夫は定まり玉ふにそもやマア妻の身で褥の上に居られ升う雪に凍へて死るのがせめてもの夫婦が誠でムリ升わいなア 淨「ア、貞節な者じやなア其眞實を聞てお身に問ひたい事がある めと「改つたお詞私もお尋ね被成



るとは、蝦外の事でもない忤入鹿が入定は佛法信仰斗りで、い外に様子が有うがなア○イヤサア知らぬとは云はさぬ親子よりしたしきは夫婦の中夫の心底サア何ぞ密かに聞た事が有うがなアサ其仔細が聞たい我強いは日頃の氣質もさうに云ふては見るもの、實は忤が不便な様子に因て忤が命が助けたい「トめどの方蝦夷を見て思入」蝦サア入定を止る思案があるかサアさうじやく、淨「猫撫聲も氣味わるさ」めど「チ、あなたとした事が現在お血をお分被成た親御様さへ御存じない事何の私が存じて居り升うぞいさア」蝦スリヤ知らぬじやまで、めど「露程も存じ升ぬとは申し乍ら脇目から推量致し升るは入鹿様のお覺悟はお前様のお心が知れぬ故かと存じ升る」蝦「ハア、此蝦夷が心は今降る雪も同然一目に見へてある潔白」めど「イエ其雪に埋れてと上から見へぬ塵芥心の底意がさうもどけ升ぬまいなア」蝦「身が心の底より入鹿が性根が聞たい」めど「マア夫はお前様のお心の内夫が常々申され升るは内大臣鎌足と父蝦夷は國の二つの柱同然とお物語り其大事の鎌足様を追退け被成たは定めて深い様子の有りさうな事かと存じ升る」蝦「知れた事此蝦夷は忠臣佞人の鎌足を追下したは天下の爲じやわい」めど「イエ」く鎌足様に罪なき事、世上の人がよう知つてかり升威勢を嫉み猜んでの讒ら言と世の人の誇らるゝ入鹿様のお心の苦しさはどの様にムり升せうぞ御異見申すとして御聞入ささか前様のお氣質心遣ひあまつてアノお覺悟でムり

升わいなア一人の榮花を極んとて世の誇りも顧み給はぬは夫がマア國の柱と呼ぶゝ大臣のお身持でムり升るかサア今でも心をお改め被成て下さり升れば入鹿様の御入定もお止まり被成るは又孝行夫の生死は親御様のお心一ツ申舅御様嫁子不便と思召ならお聞入下さり升せ夫婦が命は厭ひ升せぬぞお前のお心が直らねば天道がお赦し被成升せぬぞへ勿体ない御謀反の思召立でムり升せうがなア「ト蝦夷屹度思入」蝦「スリヤ我大望残らず入鹿に聞たよなさう有うと思ふた氣遣すなそち達が望みの通り」めど「お心をひるがへして被下升るか」蝦「逆臣謀反も忤が不便さ今入定する入鹿と聞て何の逆心」めど「スリヤすつぱりと」蝦「思ひ止つた」めど「エ、有難い彌々其詞に」蝦「相違ない證據見せう」○駒下駄直せ、めど「アイ」蝦「嫁近う」めど「アイ」淨と立寄る目先へ氷の刃はつと飛退き是ハ、蝦「動いたらぶちはなぞぞ」めど「エ、そんなら御逆反は」蝦「思ひ止る事ならぬ」めど「エ、」蝦「大望遂げなば肉身の入鹿めに譲りくれんと思ひの外道立する不孝者の忤親子のよしみも是限り一旦思ひ定めたる我大望ひるかへさんなど、は不甲斐なき忤め其小さい性根と知らずして渡し置たる連判狀サアいづくに有るうちが様子知つて居やう早く出せ出ぬと軍神への血祭りサアさうじや」めど「イエ」く御謀反の譯は承り升たれど連判狀とやらは、蝦「ぬかそまい」大事を聞たおのれ殊に安倍行主が娘生ては置れぬ連判狀の有り處をぬかせ、めど「存じ升せぬ」蝦「云ふても殺



す云はいでも殺す 兩人「サア〜」  
 「トちり〜付廻し」 蝦「何と」 淨「サア〜何と」付  
 廻り逃れ刀に肩先すらりと付込蝦夷か鋭き切先手負は大地にこけ乍ら蹴上る白砂雪煙り手  
 に渡さじと懐中の一巻火鉢へもへ立炎風に連て烈々と折しも聞ゆる鉦太鼓「トかけ船碇に  
 て遠責に成り蝦夷思入あつて屹度成り」 蝦「ハテ訝かしや連判状を焼捨てしは我大望をく  
 じいたる不孝の入鹿夫婦の奴原大事を敵へ洩らせしをア「トめどの方へツカ〜寄り」 蝦「  
 憎い女め思ひしつたか 淨「足下に踏付胸先をるぐりくる〜流るゝ血汐雪を染なす皆紅ひ  
 眼血走る表の方 向ふよ」 御上使「ト蝦夷思入あつて」 蝦「思ひがけなき上使とは扱は大望露  
 顯なし狼烟を相圖に討手の上使進退谷まる今日只今女共装束の用意せよ 淨「不敵の蝦夷帳  
 臺「トおくりにて奥へ這入る」 淨「深く入りける程もあらせず細殿傳ひ入り来る上使は安  
 倍中納言行主副使の武官大判事清澄が家來英藏人威儀を正して 藏人「兼て御計略の狼烟に  
 めどの御心底顯れぬ行主卿にも御大慶推察仕てムり升る 行主「娘めどの方を入鹿に入嫁  
 せしは別心なき折柄心得難き蝦夷が振舞若し野心あらば早速告知らすべき旨申合め置たる  
 所案に違はぬ今の相圖に孝心顯はれ某が心の悦び推察致せ 藏「誠に操正敷めどの方の節義  
 逆れ驚き入升てムり升る 行「併し斯隠謀を告知らせし上は上使入來と聞は早速出迎ふべき  
 筈 藏「御意の通りめどの方何れよお渡り成さるゝ行主卿の御光駕「ト奥へ行うとする」 行「

ア、是々藏人娘に對面は私用先づ大切なる今日の邪正 藏「何様先は蝦夷卿に上使の趣き行」  
 申下さん案内致せ 藏「上使の御入來 淨「聲諸共出迎ふ主も衣服改め上座に請し頭を下げ 蝦」  
 雪中の路次別て御苦勞千萬に存じ升る 行「今日の上使世の常の沙汰にあらず貴卿は父馬子  
 の大臣より代々のいさはし忠勤厚くありしに其身の權威に誇りたるにや畧ぼ逆心の徒をか  
 たらひ反逆の企ありとの噂故諸國の勤番武官の面々此館を圍みし所此行主は家門の好身老  
 臣蝦夷大臣にも僥忽はあるまじとおしなだめ某進んで取敢ず馳せ向ふたり所存の程包ます  
 言上召れ 蝦「エハ何事と存じたれを此蝦夷に逆心のお咎めとな 行「如何にも 蝦「最前より  
 かすかに聞こゆる鉦太鼓はスハ殿中に御大事ありやと思ふ折柄上使どのハ、ア扱は佞臣譏  
 者の詞を信じての御疑ひよな左様な訝かしき上使への返答扱とは詞ついやし 淨「詞尖どに  
 云ひ放せば英藏人進み寄り 藏「ヤア血迷ひ玉ふか蝦夷卿行主卿の只今のお詞は御家門の好  
 身だけ自身白状ある迄もなし再三御吟味有つての事夫に何ぞや出る儘の雜言過言今一言か  
 つしやると高位とは云はし升ぬぞ 蝦「ヤア慮外なやつこの此蝦夷が逆心なんぞ、は何ぞ儲な  
 藏「證據は則ち此一巻「ト懐ろより出して見せる蝦夷思入あつて」 蝦「それは 行「我等の入鹿  
 大臣一巻を棒げ諒めても承引なき父が逆心子として是を顯はす事不孝の罪莫大なれ共忠義  
 に替る道なければと訴へ出祖父馬子が意を次ぎ佛法に歸依し遁世を望み引籠ると雖も不便



や娘めどの方は謀に命を捨最前焼捨てし偽物の連判状は御邊誠に逆心あるかなきか知らしの狼烟 蘇某行主公に供奉したるは貴公の口より謀反の次第直に白状させん爲 行誠の連判状を見て仰天の様子と云ひ 蘇行主公へ只今の過言 行上みを恐ぬ傍若無人 蘇最早陳する所はあるまい 行謀反の張本蝦夷大臣 蘇速に白状召れ 兩人サアく何と 蘇さめ付られて一句一答詞なく只默然たる斗りなり 蘇ヤア一言の返答なきは彌々逆心の紛れをし最早叶はぬサア潔きよく御切腹 蘇三賢に腹切刀蝦夷が前に差置ば行主立て傍なる雪人形を手に取り上げ 行是見られよ愚なる譬なれども此束帶の雪人形も此形ちはなすと雖も火氣にあたれば忽ち水とある 蘇先づ其如く源汚れて其末清からすと申せばせめて御最期は其雪の如く潔よく御生害あつて末代逆心の悪名を洗ひすく雪の文字と俱に消果給ふは天の御爵と潔よく御切腹遊され升せう 蘇諫めの詞耳にも入れず無念に堅まる雪人形 蘇ヤア聞き度もないよまい事雪にすくぐの聲あらば我年來の望みも忽ちまつ此通り 蘇傍なる火鉢の炎の上つかみ碎けば水煙り肌押しつるげ腹切刀腹に突立怒りの眼中 蘇エ、無念口惜しや仕込よ仕込し大望も現在の悴が手より洩れたるは我運命の盡る所よし 蘇某此世を去らば忽ち天地は常闇思ひ知れ 蘇さきく引廻す太刀取り後に藏人がはつしと落す首諸共矢一つ來つて行主の胸板射抜き敢なき最期 蘇ヤア行主公を矢先に掛しは何者じや

入鹿さわくと騒がしい扣へておれ 蘇ヤア何と 蘇聲をかけて一間の襖二人の武士に引拂はせ築山の岩上蔭しづく出る入鹿大臣髪はかどろに麻衣左もすさまじき有髪の僧形藏人はぎよつとして 蘇ヤア入定ありしと聞き及しに入鹿卿の其お姿は 入チ、不審の一條語つて聞さん慎で承れ 蘇英藏人頭が高ひ 蘇下がりおらう 蘇ハアト思入鹿床几に掛り 入父大臣年月を重ね反逆の企てありと雖も其氣小さくして中々大望成就成り難しと思ふより某表には仁を飾り父の悪事を恨み佛法歸依と引籠れば上下父蝦夷に心を付け油断の間を行法の築山より上の寶藏へ隠れ道岩をうがち奇術の妙計を以て忍び入り寶物を伺ふ處先達ての評定に違はず二つの寶と失ひ玉へと叙は易々手に入たわい 蘇何御叙を奪ひ取りしとは入父が命妻が命芥の如く見捨しは此時を待つ斗りの謀事あら悦ばしやなア 蘇心地よやいさぎよしと御殿に響くうなり聲 入ハア、馬鹿者の行主は現在冴なれ共矢先にかけしは軍神への血祭り其方逆も異議に及べば立所に命を取るサア味方するやいなと云は行主がよき手本善悪二つが生死の境勝手次第に返答致せ 蘇何と 蘇サア藏人我君の御謀反に一味すればよし 蘇異議に及ぶと胴腹へ穴をあけるぞト兩人弓を構へる 蘇サア夫れは 二人味方するか 蘇サア 二人サア 四人サアくく 入ナ、なんと 蘇大悪無道の入鹿が行跡爰ぞ大事と藏人は抜くより早く我腹へぐつと突込みト藏人色々思入



有つて脇差を抜き腹へ突込 入「よい覺悟藏人切腹致す上は外に大事を聞く者なし是より殿中へ馳せ向ひ残る寶の有る所をせめ問ひ摺み挫いで心の儘用意致せ 二人「畏つてムリ升藏、早介錯 入「云ふにや及ぶ「ト入鹿刀を抜き首を切り刀を突出す玄蕃是をふくを木の頭誂らへの鳴物にて拍子幕

二幕目口 鹿 殺 し の 場

役 名

一侍 女	二八	一瀧 口	官 人	一芝六の子	三作
一同	龜 井	一藤 原	鎌 足	一家 來	綾 介
一同	杉 生	一中 臣	淡 海	一勢 子	大 勢
一同	阿佐浪	一獵 人	芝 六	一鹿	一 正

造物一面の大山上の方に猿澤の池下の方に柳是に緋掛けあり幕の内より御所車に侍女四人附添ひ居る淨るりにて幕明く 淨るり世の憂は高き卑きも亡き魂の采女の方の跡慕ひ親の歎き淺からず人目忍びの夜の鶴子故の闇に迷ふ道舍人にも家來にも只侍女のみを道案内池の邊りへ御車の軋る音さへ物淋し 阿佐浪「扱もく「常は舍人が御車を押す故に何時でも心安うづるく「と行物かと思ひの外中々自由になる者じやないわいのう 杉生「ソレく「今夜

は舍人はなくか忍びとある故随分密にやつて見てもこりやいける者じやないわいあア 二八「牛の代りは私等が随分力いづばい精出し升てムんす 杉「本にお前はさつ力強 三「牛の代り精出したが 四「井「モウ爰でムんすかいなア 三「ア、辛度く「鎌足もかいなも痺れたわいなア 淨「ねたりよたりの姦しく殊に目しいの鎌足公哀も増る御姿宣給ふ聲も打萎れ「ト車の御簾を捲上げると鎌足好みの拵らへ盲目のこなしにて居て」 鎌足「此邊りが猿澤の池かチ、誰々も太義く「淨「仰せに侍女は進寄り 阿「成程久我之助様が仰せの通り此所が采女様が入水ありし所則猿澤の池でムリ升 淨「申上れば今更に御落涙を堰あへで 鎌「我説者の舌頭にかゝり身を退けしも國の爲に倭人原を亡ぼす手立を廻らそ爲とはいへ采女の身の上安全を計るが爲なりしに心を勞する餘りにや情ない此目しい白黒も分かぬ其中に忠孝に厚き采女には早此世には亡き人と思へば不便彌増り責めては亡跡吊はんと忍びながら参りしぞや 淨「歎かせ給へばお附の人々 阿「よくく「悲しう思召ればこそ遙るく「爰にお成り遊ばせしと申者 皆々「ア、お痛はしい事じやなア「ト皆々泣く」 淨「哀催す袖袂空に知られぬ一時雨斯る折しもまなたより尾羽打枯せし浪人姿御車近く手をつかへ「ト淡海着流し編笠にて出て」淡海「恐れながら御訴訟女中方憚り乍らお取次被下い 阿「ハテ滅相を見れば無僕の侍づれが我君へ御訴訟杯とは慮外千万 皆々「下れく「鎌「ヤレ喧すし左なはしたな



くいふへからず開馴れし物としは淡海にてはあらざるか 淨、仰せに猶も頭を下け 淡、ハ、御目しいと成らせ給へども忘れさせ給はぬ御意父上お懐かしうムり升る 鎌、左こそく 阿、スリヤ若殿様にてお見せしかお見それ申せし無禮の段 四人、眞平御免遊ばし升せう 淡、過つる節會の時神例の式を誤り上みの御咎めを蒙り父の勘氣を受けしより先非を悔て市中に潜りある所蝦夷我意を振ひ父上御整居のみならず御眼病と承り且は姉上不慮の最期今宵是へ御越しと承るより前後も願ず馳参じ候も何卒父の守護仕らん爲慙れ御勘氣御免をし被下ば某が悦び如何斗り女共も俱々に執成の義頼み入る 淨、土に平伏し詫にける鎌足御悦喜斜ならず 鎌、我眞心を以て國の爲に尽すと雖ども更に佞奸の人絶へず身は家に退きながら心は片時も國家を忘れず蝦夷反逆の企ある事嫡子入鹿が忠義にて事顯はれ安倍の行主を便に立て今日事を糺すの手筈蝦夷が自殺は目のあたり左すれば天下は太平あらん今より忠孝勵むべし 淨、左も有難き父が詞 淡、スリヤ御勘氣御免下されんとなエ、有難し 阿、若殿様のお悦びはお道理至極我々迄も 四人、お嬉しう存じ升る 淨、淡海及び附々も皆悦びの其所へ御館の勤番役御車の御跡慕ひ息繼敢へず馳参じ 官人、御注進 淡、注進とは速しい何事じや 官、鎌足卿是にお渡りなる事漸く只今相知れ御注進 淡、シテ 様子は何とく 官、さん候今日蘇我の蝦夷が館へ中納言行主公藏人を召連れられ彼が反逆吟味の

所速に白狀あつて蝦夷は其場に切腹あり藏人は是を介錯す然る所行法に取籠りたる入鹿大臣寶藏へ忍入り御劔を奪取り誠は親蝦夷に越へし大悪人行主を忽ち手にかけて御館へ馳込だり是を支へる物共は或は蹴飛し切倒し上を下へと逃げさまよひ人種も尽ん斗り 淨、猶も追々注進と呼はり捨て立歸る皆々ハツと驚きに別けて鎌足歎息なし 鎌、斯迄尽す眞心の未だ天に通せぬにや又もや斗らぬ入鹿の悪心我此病なりせばなすべきすべもあるべきや大臣の身でありながら臥所さへなき身となるは 淨、淺間しき境界と歎のせ給ふを淡海は 淡、コハ父上のお詞とも覺へず邪は正に勝すと申せば必ずか心弱く召るゝな 淨、勇むる内に思慮を廻らし密に侍女の耳に口申合せて車に向ひ 淡、思ひ寄らざる只今の注進誠しうらすなれども是より直に家來を東大寺の山門へ遠見に遣こし安否を知らせ申上んヤア、綾介うちは早く東大寺へ馳行き見届け参れ 阿、ト淡海色々こなしあつていふ侍女皆々きよるくして 皆々エ、何の事じやいなア 淡、エ、ハテ扱く 阿、ト色々こなしあつて綾介を招き叫さ 淡、何様館の外知らぬ侍女の身山門やら遠見やら合點の行ぬも尤々 阿、ト又一寸叫く 阿、ム、成程く 阿、ト段々に叫き合ふ 淡、斯ういふ内も心せく綾介早く 綾介、ハア、 阿、ト足拍子で下手へ這入る皆々思入あつて 阿、チ、若いに因て宙を飛ぶ様にエ、烈しい人じやわいなア 杉、あの足の早さでは追附け吉左右が分り升せう 三、必ずか心お痛め遊ばし升るなへ



殿、夫々何ばあせつても女子では婿が明かぬ 二、どうでもこんな時は殿達でなければ明かぬ  
 く 淡、イヤく左のみ悔まれな變生男子と申義もあれば随分春日明神へ祈請あらば男に  
 なられまい者でもないてや 淨、心に思はぬされ言も父を勇むる其内に綾介の小蔭より俄に  
 足音バタくく 淡、チ、綾介待兼たく 阿、チ、早かつた様子は何とく 綾、ハア、仰  
 せに随ひ山門に駆け参り只今遠見致せし所諸國の軍勢蟻の如くお館へ馳参じ内は無尽に切  
 立る忠義の刃金にさしもの入鹿こそ愛よと迷惑ひ直ちに退け忽ち穩に成り候へば 淨、早  
 御歸館あらせ候へと誠しやかに相述べれば鎌足安堵の思ひなし喜悅の程ぞ限りなし 淡、ヤア  
 女共最早相恐るゝ事もなし心靜に御歸館く 淨、長柄を取て舍人役押て行衛は何國とも空  
 定めなき空勇み露踏分て 〔ト三重にて車を押し皆々附添ひ這入る是にて淺黄幕を冠せる  
 造物一面の淺黄幕に成る 淨、辿り行山の道々狩人共芝六親子弓矢手挟み打連れてこなたの  
 木蔭に立止る 〔ト此淨るりの内狩人四人名々道具を持出る跡より芝六三作弓矢を持出る 〕  
 芝六、何と皆の衆此間から毎日毎夜此様に山を狩り廻はせど兎一正仕止ねバア、狩人も是で  
 はあかぬわいのう 〔ト左ればいの其上此春日山の明神様の使はしめで鹿を殺す事のならぬ  
 夫丈け狩人も不自由にゐるてや 〕 さいのう若し過て殺した者は大豆の刑とて石子詰に逢  
 ふたら唄めが内でひしこ死になり居るで有う 〔ト何をいはるゝやらサア皆の衆行升う芝六

殿サアくムれく 三、行升うサア三作よ來い 〔ト行うとして腹の痛むこなし有て 〕 芝、ア  
 イタ、、、 三作、と、様何とさつしやつた 芝、イヤ冷腹が起つたやら左の横腹がアイタ、  
 、 〔トハテ扱氣の毒な三作殿氣を付けさつしやれ 〕 芝、イヤモウ案じて下さるな高で冷腹  
 じやもろつとしたら治り升先へ往て下され 淨、四人は打連れ山道の谷間深く急ぎ行 〔ト狩  
 人四人上手へ這入 〕 三、コレと、様さつう痛み升るのや 淨、脊な撫さする其内に芝六あた  
 りに心を付け 〔ト忍び三重に成り芝六こなし有て 〕 芝、三作よ案じな腹の痛いといふたは陸  
 じや 三、エ、〔ト相方 〕 芝、あいつらを先へやつたは外に深い思案が有てあいつらが手分を  
 して山の手と谷々へ履ひの勢子共と一つに成て狩出さば其物音の騒に紛れ兼て我に言附た  
 彼爪黒といふ女鹿は千正の中でもたつた一正有るかないかたしな物なれど首尾能う其爪  
 黒を捕り度いばありで此様に骨を折るのじやわやい 〔ト此内鐘太鼓の音する 〕 芝、ヤレア  
 ノ鐘太鼓で追立たら驚いて向ふの山を越すと定必ずぬかるなよ 三、そんならお前は其爪黒  
 といふ鹿を見やしやつたかや 芝、チ、おれが心を尽と念力が通つたやらあの葛籠山の向ふ  
 の谷間で見附て置た程にわりや是から谷へ廻て勢子の者に貝鐘鳴させ其爪黒を早う追出せ  
 く 三、アイ心得升たがひよつとお前の身の難義となつたら唄様やわしは何とせうぞいな  
 ア 淨、だうし升うと稚氣に後ちを案じるさかしさは孝行見へて慥れあり 芝、ハテ扱氣の弱



い事をいふ奴じや誰じやと思ふ狩人中間では小口をさくかれじやわい人に知られるやうな事してたまる者か 三「じやといふても悪事千里とやら 芝エ、ませた事を若し願れたら百年目じや命掛な事するのも此身の榮耀を望むのでない此狩人の商賈は人間のする業じやない因てせめてわい等は此業を止めさして侍に仕度い斗りじやと、が身の上に氣遣いはさい程にサア早う谷蔭へ行けく 三「心得升た 芝「おれは別れて麓の方 三「合点でんんす 芝「ぬるるなよ 淨「示合せて親と子が道は二筋引別れ山路を指て「ト又太鼓鐘を打ち兩人別れて這入る宜しく淺黄幕を切て落す返し

造物向ふ打抜き一面の山の遠見も成り杉松の立木随分澤山入用空は松の釣枝都て葛籠山の模様宜敷道具留る 淨「急ぎ行谷山峯に暉うす敷の松明螺鐘の響きに連れる勢子の聲松も嵐も喧すきスハ能き時分と芝六は弓矢つがふて麓の方木蔭に隠れ待所へ猪を狩出す山路の騒ぎ俱に驚き駈け来る鹿件の爪黒得たりやつと切て放す矢過たず鹿の咽笛貫きて其儘其處へ倒れ伏す「ト向ふより芝六三作走り出て来て「三「と、様爪黒の鹿 芝「シイ／＼「ト邊りを見て思入有て「芝「首尾よう仕止めた 三「と、様どうやらこはうなり升たわいのう「ト色々震ふこなし 淨「身を震はして涙聲 芝「ハテ／＼と氣遣ひするな「ト鹿をかたけ思入有て「芝「人の見ぬ内來い「ト三作の手を引て「淨「鹿引かたけ親子連れ宿りを指てぞ「ト三

重にて三作を連れて向ふへ這入る幕

二幕目切 獵人芝六住家の場

役 名

- |              |                 |           |
|--------------|-----------------|-----------|
| 一大 納言 兼 秋    | 一 藤 原 淡 海       | 一 采 女 の 前 |
| 一右 大 辨 政 道   | 一 内 大 臣 鎌 足     | 一 女 房 お 雉 |
| 一侍 女 阿 佐 浪   | 一 興 福 寺 衆 徒 鬼 注 | 一 獵 師 芝 六 |
| 一同 杉 生       | 一 瀧 口 官 人       | 一 侍 大 勢   |
| 一米 屋 新 右 衛 門 | 一 芝 六 子 兄 三 作   |           |
| 一金 輪 五 郎     | 一 同 弟 杉 松       |           |

造物三間の二重見附暖簾口上手反古張りの障子家体下手落間奥深に春日山の遠見いつもの所門口都て獵人芝六住家の体幕の内よりお雉前垂褌侍女二人折敷にて米を撰り居る体にて幕明く 三「本にお前様方は嘸か氣が尽升うなア如何様上々様といふ者は此様に米を粒撰りにしてちつと色が黒いのイヤ是はちつと缺けてあるのとすつさり撰み出しても上升のはちつと斗りでムリ升ぞへ 阿佐浪「如何様下々の衆は辛氣に思はしやるも尤なれど我君様へ捧げる米に少しでも鹿末があつては御爵を蒙るわいの 杉生「随分念に念を入れてさへ誤り



仕落ある習ひろもじも万事に氣を附けて下されや 雄成程御尤な事でムリ升私共の爲にも元の御主人様上げ升米を碓で踏では足が腫さう者じやわいな 阿イヤ〜又そんな者でない飲み食の段になるとお免るしがあるわいの 雄ハチなアそんなら勿体ない事でも斯うせにやならぬといふ事は御了簡がムリ升かへ 阿ある段ではないわいのう 浮るリ笑ひ綻ぶ障子の内しはたれ公家のまよげ翼しよんぼりと立出給ひ 大納言ノウ〜侍女達夜も早初更よ及びしにか夕御膳は何として延引に及ぶぞ 右大辨御膳番は何處にかる甚以忘りなり 雄ホ、あなた方とした事が矢ッ張お館の格式の様に御膳番じやの忘りのとそんな仰山なものが獵師の内は何のムリ升せうぞいな貧乏世帯といふ者は何も角もたつた一人朝むつくり起ると直ぐに釜の前から庭の掃除は仕丁とやらの役夫から菜指水汲焚附る所がか清所の飯焚役てんど仕廻て疾る所が御臺様の役百人前も一人まてする事じやに因てらつと遅うなつて手の廻らぬ所は御堪忍遊ばし升せいなア 大チ、尤の言上此程此家に日を送りうちが下賤見るに彌増す我思ひ斯る時節にあらずんば下賤のうち達が手業を見る事も有間敷に現在のくわを見て過去未來を知るといふ故事もお事が操を賞美なせし事ならんあら戀しの昔淺間しの憂世じやなアト子細らしう泣く右大辨も少し泣く又氣を變へて 右コハけしからぬ御愁傷昔は昔今は今此身に成ては植生の住居も玉の臺となせ思召さぬぞ既

に以て古歌も雲の上はありし昔に變らねど見し玉垂の内ぞゆかしきと詠じたれば今の懸垂がかんばしくムるわいのうト大納言思入あつて 大スロヤ貴公には今の懸垂がかんばしいとぞ 右中々 大右大辨といふ縁語を以て薦垂の内をかんばしと思はるゝは尤なる事なれども我荷も大納言の位を保ち今は漸う朝夕の小豆粥の大納言と呼はるゝ悔しさを推量あれ方々ト泣く 雄ホ、本にあなた方のおつしやる事は一つも合點の行くものじやないイヤ夫はさうとこちらの又我君様はモヤ歸らしやれさうなものじやが 浮遅い事やと夕陽に山を仕舞ふて親子連息せき脊中に大風呂敷寒風に汗たら〜岡の我家の門 芝六嶺今戻つたぞ 雄チ、戻らしやんしたか三作能う戻りやつたのう 三作アイ今戻り升た 芝是はしたり大切な方々をなせ端近う出し升るぞい又お前方もお前方じや何の事はない在所のねり物見る様を仰山な形りでもよろ〜と出てムつては何ば近所隣りのない一つ家でも誰が見まい者じやムリ升せぬわいのなせ奥へ這入てムリ升せんぞいなア 右チア予も其心附ざるにはあらねども 大此曉に茶粥とやらんいふあつ物を噉りし儘夜も早少し暮たれどもお事が夕飯の沙汰なき故思ひす爰に浮れ來たのじやわいやい 芝イヤ是は御尤じやなせ又ちやつと上んぞいやい 雄そりやわえも合點じやけれどお前が戻らしやんせんに因て夫なア夫〇夫で遅うなつたわいなア 芝サア夫でかれも何や角や〇用意して戻つたのじやわ



「ト財布より米を出し」雄、ア、嬉しや夫でマア落附たわいなア。芝、サアお前方も疾々手傳ふて〇といふても神子殿の様に長い物を引ずつて此袂の内をあるいてひよつと裾でも踏でこけさんすと濟んと思ふてコレ〜奈良の町でよい流れを買て来やんしたサア〜皆是と着替さつしやり升せ「ト布子を大分出す」雄、本に是は能う氣が附た是を召てゐると人に目立いでようムリ升。芝、時の用には花色の紋附是をお召玄被成升せ。雄、着せるどてらのゆき丈も哀れきのふの長袖を在所小紋の臥袖似せ兜羅綿のひたら帯根から似合ぬ御装束。雄、ホ、何の事はない矢奪の下郎を見る様なマアあれで目立いでよいはよいけれど大納言様といふては詰らんどへ。芝、マア右大辨様は右大辨介様。有、何やつがれが名は右大辨介と改名せよとな。芝、大納言(〇)権兵衛様がよからう。芝、スリヤ予が改名は権兵衛とな。芝、侍女の方も瞬何ぞと名を附て上升いやい。雄、アイ〜姫御前は姫御前とうして阿佐浪様のお阿佐様。芝、杉生様はお杉様。雄、何をいはしやんす事やら。大、サア〜名も片附たに因て是から我等は寐酒を一盃せしめる程にマアあなた方には御膳を早う上升せいやい。雄、本にさつきにから待兼て居やしやんすわいなア、つ〜とモウ何や角やで御膳が遅うなり升ておひもじうムリ升うなア。大、イヤとよ最前は何か心淋うはんべりしが今主じが調へ歸りしうちまきの姿を見て安堵の思ひに腹膨れ今にては左のみ欲うも思はぬぞよ。有、鎌足公さへ御安泰

なれば予等が事は苦しからず心遣ひ無用〜。芝、イエ〜何ば尋常にかつしやつても昨日から砂利が切たに因て茶粥で咽し升て置た加減か喉見いどうやらか頰が細つた様などよ。「ト此内大納言右大辨唾を吞込んであぢな欠とする」。芝、ハアうんじやうな事いふてゐるけれど今の欠の盃梅の虫唾がはしるのじやちやつと握飯などして上升せい「ト奥へ這入る」。雄、亭主は如才内證の疵環を暗めて入る所へ腰に帳面ぶら〜と郡山の搗米屋。米屋、内方にムリ升るか。雄、チ、新右衛門様能うお出被成升た。米、イヤようは來升せぬ悪う來升た一体昨日來る筈あれぞ。雄、サア〜御尤でムリ升昨日私が方うら持参り升うと存升たれど何や角や忙しさについと参り升せず又折角お出被成たれど今日は折悪うこちらの人が。米、チット留守使ふまいお定りの晦日に來ると何時でも留守〜と朝から出違ふて居るといふ其穴を見極めて朔日に仕掛たはこつちの秘密四の五のいふて拂はぬ癖に箇季にあせ書出しおこさぬなどい小みつがいやさなコレ書て來たぞや「ト書出を出し」。米、去年の尻残りが六十六匁三分五厘こりやマアいつ造つり付るのじやぞいの。雄、何のマアあなたを釣と云ふ事はムリ升せぬけれど此様に御不汰沙に成るも。米、ア、是口先斗りであつばくさ其手じやいかぬぞやモウ〜後とも云はさぬ今おこしやチ、取らにやいなぬのじやぞ。大、ヤヨ下々の者いどはしたなき争ひかな静まれよ姦しい〜。米、何じやかまそじやののますごこの此邊りで



の見馴ぬわろじやが敷醫か按摩か手の筋でも見るわろか此様なけない人を置やるに因てい  
 けんのじやわいの是山ぶ茶一盃汲で下あれ 雄「ア、滅相なあなた方は大事のお客じやわい  
 なヲ、氣の毒やのもしくわきた方向にもお氣にお掛被成て下さり升なへ 米「イヤ代は氣  
 にも掛て貰はにやあらぬわの衆達の鼻の下を養なふた米代をれが云ふのが無理か此書出を  
 見や 大「よ、此切紙は色紙の形ハテ珍らかな三十一文字書出し一ツよね代ひるむつこぞの  
 霜月残る白金ハア、是は戀歌とも思はれず米「イヤ戀も戀借錢乞じやわいの 大「何にもせよ  
 下々にはやさしくも三十一文字をつらねしな 米「エ、三十や四十のはした錢じやないわい  
 の貴様も掛り人ならよう聞しやれ愛の芝六は盗人じや「ト大納言の耳の際で云ふ大納言恠  
 りする」 雄「ア、是何でこちらの人が 米「サア斯う云ふのが無念なら金拂らへ 雄「サア其金  
 は 米「無かなか大盗人と云ふ者噂衆爰らは又こなさんの心次第でア、結構な了簡が有けれ  
 せこつちのら勸めるでもなし 雄「申々結構な御了簡とはそりやマアどうすればようムリ升  
 へ 米「サア其了簡と云ふは 雄「御了簡と云ふは「ト米屋言兼るこゝしにて」 米「あの質は芝  
 六に百目近う仕送つたのしやりから付入てうもじの舍利塔 雄「エ、 米「どうから念掛て居  
 る事は尻目づかい詞の五音でも知れさうな物を知らぬ顔はしやりとては馴染な芝六留守と  
 有れば幸ひ留守が定なら是どうぞ 雄「エ、滅相な主は内にじやわいな 米「ヤア、内に居る

が定ならサア金受取うか 雄「イ、へ留守じやわいなア 米「留守なら是一寸「ト右大辨大  
 納言真中にすわる」 米「被醫者め何で邪魔する「ト詰掛る大納言物云わすに急度成る」 淨「  
 兼秋忽ち顔色替り眉毛逆立目に角立以ての外の御怒り 大「慮外者めがいつろ 淨「と米屋の  
 面を睨み付物狂敷立玉へば右大辨米屋兩人大に驚ろき 右「申々今の米屋めが工みは憎けれ  
 ども今にてハ世を忍ぶ我々 大「辨介痛くな止玉ひぞしやり代を幽にしてか雉をせしめん悪  
 工み間男の親玉め引裂捨ん 淨「笏に手を掛け言かくれば「トつかく」と寄るを身をかはず  
 大納言すべりこける」 米「置あがれ猿すこめさつきにから馬鹿に成て居れば様々のたわ事  
 おのれらにふつくられて仕掛た戀を叶へすに置うかサアお雉かじや「ト引立るを奥へ芝六  
 出て取て投る」 淨「首筋擱んで板間へせつさり悔りし乍ら負ぬ顔 米「夫程内に居乍ち留守  
 を遣うがけたいか悪さにさつきにからした狂言は皆我を釣出さう爲の米屋が釣る掛の謀計  
 じやわい内に居乍ら留守を遣ふからは暫時も待ぬサア米代渡せ 米「イヤ米代は渡してある  
 米「ろりや何時渡した 淨「ハテ間男の代三百匁の内六十六匁引て残り二百三十四匁サア  
 つりせうかい 米「サア夫は 芝「後とも云はぬ今受取うかい 米「サア夫は 芝「但しつりが無  
 ば并べて置て四つにせうか 米「是短氣を事せまいぞ 芝「ろんから三百匁の都合算用するか  
 米「サア 兩人「サアくく」 芝「何と 淨「サアくく何と」詰掛られぎつちり詰つた入口びつ



しやり門口へて 米留守じや 芝何と 米間男代も米代も逢ひさへせねば取やりなし留守  
 は五分く芝六重て逢はう 淨達者な者は口斗り脚引すつて逃歸る 大汝が支度の其内を  
 延ばさん爲心に有らぬばさら事 右權兵衛卿の頓智の程驚き入升てムリ升 雄イヤモウ私  
 の大駄難義な事じやなかつたわいなア本にあかた方の手前もお愧かしうムリ升 芝とんと  
 骸中が色と慾とで固まつてムリ升 淨姿は地下に落乍ら心は高き右近衛の中將淡海公ツカ  
 くど立出 淡海兼秋卿政道卿父にも今日殊の外の機嫌是といふも芝六夫婦が深切故過分  
 なぞよ 芝是は又改り升たお詞 雄御勿体ない何のマア私等にお禮おつしやる事はムリ升  
 せん 芝最前からのやつさもつさ若し鎌足公のお耳にも立升せうかどとんと胸をたいてお  
 り升てムリ升 淡イヤ其心遣ひは我迎も同じ事斗らざる入鹿が亂斯る有様の父がお耳に達  
 しては彌々惱みも重らんと何事も包隠し只太平の姿にもてなして此家にかくまひ奉るも偏  
 に芝六が心勞方々にも其お心得下されい 淨詞半ばの破壁 内より御出座 淨聲諸共に押明  
 る明り障子のがたひしと御痛はしや鎌足公此賤が家とは露知らず櫛の上に押直れば 皆々  
 ハア、淨と威儀を正して拜謁ある阿佐浪杉生は四方の御盤平戸焼の茶碗土器其儘に下げ  
 る御膳を淡海押止め 淡ハナ心得ぬ朝げ晝のお物少し斗り召上られ今夕の御膳はお手も附  
 けず此儘下げよとの仰せか 阿杉左様でムリ升 淡扱は御料理が心に適はぬかエ、不調法

な御膳番急度申附けん 録左な心を痛めお膳番の者の罪ならず両眼暗き病ふの上米女が  
 別れの歎きに沈み思へば詮なき心の迷ひ 淡エ、御目さへ明かなれば遠方は扱置き此館の  
 内よてもか心を慰むる御遊覧の所は様々ノウ兼秋卿 大成程ソレ新にしつらはれし其障子  
 繪絹には桐に鳳凰扱見事な彩色の 右上段の繪は竹林の七賢 淡又廊下より奥の間の四季  
 は中々斯様な事ではムリ升せん 右如何にも杉戸には蘆に鷹雪に梅種々色々の名畫名筆  
 大イヤモウ毎日見ても見飽ぬ有様 淡チ、夫如初春にもならざるに早梅の咲出しの正しく  
 父上のお目も開かるべき瑞相 三人お目出度う存じ奉り升る 録實に左こそ我惱みも未だ  
 月日の立されと館の中だも見る事叶はぬ常闇も國の爲に心を勞せし餘りのいたづき神も見  
 放し給ふまじ病平癒を祈りの爲樂人共を召出し壽の管絃を始めよ 淨ハツと斗り俄に管絃  
 の才覺も只淡海は冷汗ながら 淡是は宜敷思召樂は何がよかろうぞ還城樂か武徳樂か樂人  
 共を申附んト皆々顔見合せ思入 淨立ばの汐に芝六が手を引て門口に出ト大納言も付  
 出 大扱迷惑な御望み俄うに管絃の用意なければ 淡出来るにしてゐらるが笛太鼓で騒ぎ  
 立ては忽ち御有家を諸人に知られる難義何と思案は有まいか 芝滅相な思案も才覺も程が  
 有物管絃とやら舞樂とやらどう工面が出来る者でこりやどうぞ變替へ被成升せ 淡じやと  
 云ふて今更何とも 芝一跡マアこんな内で餘りお前が太平樂が過るに因てムリ升わいお



淡「サア其太平樂が万歳の御代の印しを申するのじやわい」芝「ア、其万歳の御代で思ひ出した管絃の代りに万歳は間に合升まいかな」淡「万歳とは」芝「私も方々流浪致し升内廣瀬に些どの間かり升たに因てへれ」万歳を覺へて居り升万歳で間に合しては何とでムり升せうな」淡「如何様夫は一段よからうわい」淡「夫屈強と父の前」ト内へ這入り手をつかへ」淡「父上へ申上る樂人共俄の腹痛に暫らく延引の内廣瀬村の万歳瀧口へ参り候梅の早咲と申春に先立つ万歳が参りしも吉左右庭上にて千秋万歳相勤めさせ候はん」夫御免あるぞ始め升せい」ト思入有て」芝「ハア、」ト大納言と呬合二人内へ這入る皆々思入右大辨にも呬く皆々侍女にも吞込す思入」芝「樂人参上仕り升てムり升る」四人「早く」皆々「ハッ」淡「仰せにハッ」澁團扇鼓代りに万歳と」皆々「有難かりける我君の」淡「御惱も静まりお目も開き玉ひけるは誠に目出度候ひける」ト此文句に合せて二人澁團扇にて柏子取」大「先此あきんつすのはじんまりは」芝「あまんの逆鉾にて青海原を探り玉ふ」大「天の浮橋」芝「雜糞箸や」大「つのまんみ喰ひなら」芝「二膳かたし」ト身振する」芝「一本の柱は」大「いざなぎ」芝「いざなみ」大「二本の柱は」芝「二天の毘沙門」大「三本の柱は」芝「三王の」大「櫻の木に」芝「猿が三万三千三百三十三正下つた」大「ヤア」ト下つた」芝「今年は降た因て上げやうと思ひの外」大「下つたとは」芝「賣買共に仕合」大「芝、仕合」芝「四本の柱の」ト大納言家の門を見廻し」

大「去つてもぢいひさい四方八方」芝「五本の柱は」大「ごもくだらけ」芝「ハテ扱」ト睨む故に大「五本とごもくと取違へちちちやんちち」トや六本の柱は」芝「六万壺の鼠泣」トすだれを上げ呼込こなし」大「鼠なきとは」芝「ハテちう」ト〇忠臣」大「七本の柱は」芝「七難即滅古手や呼で布子のやりくりろろ」ト背中がかゆなる去とはうるさいこつたホ、ホ、大「ヤアレのら如來佛様」ト二人ちよんがれに成る淡海氣の毒を思入」淡「エ、」ト中啓にて芝六が頭を叩くと芝六思入有て」芝「ア、」トおれが是が否さに否じや」ト云ふ者を無理にしくさつて」ト腹を抱へ術なきこま」芝「ヤイ」トこりやおちは殿氣が附た」芝「どこをたいた」大「だいた」芝「根治右衛門とらけ婆々を呼でおじや」大「コレ」トお乳母殿忙がしなつて来たちやつと産着を仕立た」大「私もいそがしいドリヤせんなら和子の産着を仕立升せう」ト仕立物するこなし」大「針目を搦んでチ、お乳母殿手さしじや」芝「ヤア」トせうやらこうやら出来上つた」大「針目も立派によう出来升た」芝「モウ」ト志きりが来たわいな」大「女子の辛抱は愛じやぞいきつんだ」ト色々思入有て」芝「チ、玉の様な和子じや」大「こつたが口より熱湯を出し」芝「何だか口がぬる湯を出さ」大「アイヤさんぶり」ト眞の一天に誕生をしなす」大「若君様」芝「誠に」二人「目出度」大「千代に八千代に」ト万歳の体」淡「いじくも祝せしものかな誰か有る満足」淡「ハッ」淡「管絃絲竹も祝儀は同じ今日の舞



柴も事終れば心の儘に退出致せ 皆々ハア、淡イザ父上にも御休息 芝先お入りおられ  
 升せう 淨御身の事は知り玉はず各顔を見合て額に汗の天が下暫し御入遊ばしける〔ト跡  
 樂にて皆々這入る跡に淡海芝六残り居て〕 淨芝六傍に差寄て 淡海様 淡コレ〔ト合  
 方〕 淡芝六出かしたそちが才覺に因て益尊顔麗はしきも偏にうちが身の冥加父の尊慮に  
 叶ひしぞ悦べく 淡シテ兼て申付置し一義は 芝調達仕つてムリ升 淡何彼の一品が調  
 ひしとな 芝仰せ付られし爪黒の女鹿近邊の山々を尋ねても取得難く數日を送り升内不思  
 議に昨日見付出し早速射留め乳の下の血汐を絞り此壺に入置升てムリ升 淡適れの働さ太  
 義く此一品さへ調へば天下の用に立つと云ふ其子細一大事なれば未たそちにも明さず深  
 く秘したるは父鎌足卿の代願に金輪五郎今國疾くより興福寺の山上に閉籠り天下太平祈り  
 の爲百日の行ひも則今日満願の終り得難き鹿の手に入る事大願成就のしるし忠義の存念届  
 し上父上館に歸りなば其方が勘氣も赦免改めて元の家來玄上太郎利綱主従三世の奇縁の結  
 べよ 芝ハア有難き御一言此年月の念願成就仕るは浮木の龜とも優曇華とも武運の開く今  
 月今晚恐れ乍ら鎌足公へ御取成願ひ奉り升 淡此度の忠義此一品の大功如何で龜器にせん  
 少しも氣遣ひ仕るな 芝エ、有難うムリ升 淡土に置ても穢れなき 芝藁家の軒も暫時の  
 お館 淡柴の戸ばそに竹の柱も 芝すぐなる御代に 淡曲れる入鹿を 芝退治の密談 淡

万事は奥で 芝マアお入被成升う 淨後の哀れと白張りの障子引立入玉ふ芝六跡に獨り言  
 〔ト合方に成り芝六色々思入有て〕 芝君の御爲とは云乍ら所の定神慮に背きし天の罰〔ト  
 思入お雉酒を持出立聞の思入〕 芝今にも召捕られ刑罰に行はれんは覺悟の前との云へ若  
 し某が死罪とならば不便や女房が〔トこなし有て振返るひようしにお雉酒肴を取落す双方  
 悔りのこなし有て〕 芝ヤア女房共か 芝そんなら若しやあの鹿を 芝すりや最前からの  
 様子をば 芝エ、○こなた命が二ツ有かいのう 芝様々のたわ事凡日本に一つに極るは勿  
 体なくも日月と命じやわい 芝サア其たつた一つの命で大切な挺を背いてよう殺さんした  
 のう 芝ヤ〔トきつくり思入お雉ツカ〕と門口へ出て門の戸をひつしやりしめてこなし  
 有て 淨狩人仲間は嚴重な御詮議女房の私に心の内はどの様に有うと思ふて下さんすぞ  
 いのう〔ト泣く〕 芝すりやマア何の事じやいやい 芝アレまだいのお前の心は鎌足様へ忠  
 義と覺悟極めさんした事で有うが若しお前の身に凶事が有たらアノ三作が○ちア常から力  
 と成て下さんせと頼んだ事はどの命で○エ、胴慾なよう殺さんしたのうく〔ト鹿殺した  
 と云ふ事を隠し泣く〕 芝エ、〔トこなし有て〕 芝如何にも殺した 芝夫で濟るいなア〔ト  
 大泣に泣く〕 芝ハテ濟でも濟いでも脊に腹夕べからしやりが切れて有るに因て皆茶粥で  
 かよがして置たも大勢の喰口と味噌鹽さつきの布子迄賣て戻たのじやわいのう 芝エ、其



事でないわいなわしか心はの(ト云はうとするを芝六こなし有て) 芝ハテ心ころ心迷はす心なれ爰は端近マア奥へかじや 雄夫じやと云ふて私はどうも氣が濟ぬ 芝ハテ何も案じる事はないわいまだ我に篤くりと云ふて置事も有れば 雄ろんなら心の奥庭を 雄誰憚らぬ小座敷で 雄心の下紐打解て他人入らすのころくと 雄寐物語りに篤りと 雄ぞんなら云ふて下さんすか 芝ハテ云はいでかいやい 雄ぞんからこちの人 芝噂こい(ト睨ふ成り奥へ這入る向ふか歩行出て來て) 歩行是々々興福寺のたつちうから鹿殺しの科人は獵師仲間極つた故吟味して訴人した者には御褒美を下さるとのお觸じや程に庄屋様迄をんせへ今じやぞへ早うごんせへ 雄云捨歸る高聲は小耳にハツと三作が(ト三作奥より出て) 三作ヤア鹿殺しの科人を詮議のお觸とは若と、様の身の上になりませまいかコリヤとうしたらよからうぞいのう 雄稚念心のやさしくも眞實案と詫び住の 三さうじや(ト雄手習ひ文庫破双紙筆喰しめし何やらん七ッいろはの消書文章書さがしやのわんばく弟 杉松「コレ兄様さつきの箱下され 三チ、夫もはしからうがコレ杉松兄が頼む事聞てたも是此狀を興福寺の門を叩いて持て往て寺中に差上げ升と云ふて渡して來てたも 杉持て往たら何ぞ賃下さるか 三やる共く賃には春日の火打焼買てやるわいの 杉本間かや 三本間じやく何の腔を云うぞいの 杉賃さへ下さるならコレ往て來うか 雄すかさるゝのもす

かすのも年よりのしこ杉松が狀懷にちよか(ト走り見送る兄が書殘す筆の命毛器用なが仇と白地の神ならぬ折も折ころわれひろくと表に伺ふ捕手の侍(ト此内三作奥へ這入る瀧口捕手の形りにて大勢連出て) 雄口ろりや踏込み 雄ハッ 雄駈行奥へ駈出す芝六 雄待つたこりや案内もなしに狼藉な何するのじや 雄狼藉とは慮外者踏付て繩うて 雄腕廻はせ 芝ム、聞へたか前方は鹿奉行のお手下の衆でムり升な 雄イ、ヤ此家の内に吟味有て入鹿大臣方詮議の役人 芝ヤ何と 雄科はかのが心に覺へ有らんかくまひ置し者あらんサア有様に白狀せい(ト詰かける芝六思入有て) 芝ハア何の事かと思ふたれば内証のかくまひとはマ、仰山なお咎私じやとて貧乏な狩人でころムれ内のかくまひはせにやなり升せぬわいの 雄ヤアとばけまいかのがかくまひしはお尋の鎌足並に悴淡海が詮議 芝ヤア 雄遠て知らぬとあらがへば此通り 雄傍に有合う三作を取て引寄差付る刃は胸に差當る人質とられて 芝聲へ如何様をされても左様なお方をかくまひし覺は 雄ないと云はい此悴を半さし 芝サア夫は 雄但し白狀するか 芝雄サア(ト) 雄何と 雄何と、詰かけられ 芝ハア是非に及ばぬ 雄白狀するか 芝如何にもとは申者の爰ではどうも申され升せぬ大庄屋が方へ參り委細の申上り 雄ム、スリヤ庄屋が方で白狀さへすれば悴は助る(ト三作を突放し) 雄早く歩め(ト十手にて皆々取り巻く芝六思入有て) 芝コリヤ三



作わりや表の戸をしめてなア喉に氣を付いとあア合点か「ト吞込す」三「アイ」く 雄「サア  
 行ぬか歩め 雄「参り升」ト十手振上げぢりく付廻し乍ら這入る」雄「毒蛇の口の一思案心  
 は跡に出て行一間に様子立聞淡海 雄「侍女」く 阿「杉」ハア、「トつかく」と出」阿「佐」けは  
 しろお召し被成るゝは 淡「芝六が心底忠臣無二と思ひの外子に迷ひ大事を誤る今の振舞拷  
 問に及ばゞ儘に白状せん事計り難し左すれば父上此所には心元なし密かに今宵の内に御供  
 し立退かん皆々用意しやれ 阿「杉」心得升た「ト奥へ這入る」 淡「某は芝六が歸りを待受け實  
 否を糺して一證議 雄「鏑元」くつるげ立上る 雄「マア」くくお待被成て下さり升せ「トい  
 ひながら出る」 淡「すりやろちも様子を 雄「何も彼も承り升てムり升 淡「日頃に似合ぬ芝  
 六が心底 雄「お疑ひ被成るゝは御尤でムり升れど是迄の心遣ひ御勘氣を赦されたいと心を  
 碎く夫假令どの様な責苦に逢ふ逆も白状する様な未練な心でない事は私がよう存て居升る  
 程にマア歸られてから様子を糺してモン胡乱な事がムり升なら夫とは云はし升せぬ君の爲  
 には代へられ升ぬ私が方から理非を糺してお目に掛升せう 淡「スリヤ其方が夫の心底を 雄「  
 急度糺して明さ暗さは今宵の内私にお預け被成て下さり升せ 淡「何様一命を差出し頼ま  
 るゝ程の芝六が心底とは云へ草にも木にも心置かるゝ此時節 雄「スハといはゞ私か方から  
 淡「用捨致さすうち共に 雄「御主人様に逆らう天罰 淡「冥利を思はゞ 雄「急度糺してお目に

掛升う 淡「善悪生死返事と歸りを待て居るぞよ 雄「心ゆるさぬ關の戸は破れ障子のつゞく  
 りを反古にせじと間に合ひ紙書集たる胸の内母の心も三作も俱に案する折柄に興福寺の衆  
 徒鹿役人を先に立たる杉松がしるしの門口差覗き 衆徒「ム、科人と云ふハアノ悴よな踏込  
 で細打て 侍「捕つた 雄「捕て引立用意の早細お雉驚き 雄「是滅相な大事の子を何と被成升  
 る」ト寄らうとするを引退け」 衆「寄りあがるお鹿は春日のつかはしめ殺したる者は古へよ  
 り大垣の刑に行ふ大法 雄「ろりや知てかり升れど此子には何の科 衆「知れた事鹿殺しの大  
 罪人 雄「イエ」くく何ぼ狩人の仕業じやとて狩人のまだ外に大分ムり升のに外の御詮議  
 は被成れずこちの子一人が知つた事の様に常推量に被成升は何ぞ體な 衆「証據は慥な訴  
 人が有る 雄「ム、其訴人した奴は何と云ふ奴でムり升な人の大事の子に無實を言ひ掛た奴  
 切りきざんでも飽足らぬサア其訴人した奴爰へ出して見せさしやんせ 衆「則其訴人は此悴  
 じやわい」ト子役を突出すお雉恟りして」 雄「エ、滅相な何のマア此子が 衆「現在の弟がよ  
 もや相違は有まいがな 雄「じやと云ふてマア是々ばんお身やさつきから何所へ往ていやつ  
 たぞいのう 杉「かりや此狀を持ってアノ坊様の内へ往て今連立て戻つたのじや 雄「何じや此  
 狀を持って往て連立て戻つたとて 雄「云ふに怪しと引取て讀む度々に胸をさく」 雄「ヤアお  
 尋ねの鹿殺した者は私が兄三作に違ひハ無御座候らんなら此書付を 杉「ア、私が持て行升



た 雄「ヤア、杉サア兄様約束の賃下され 淨「餓頭はしいと頑是なき 雄「エ、何を云ふの  
 じや頑是ない子供の云ふ事取上てくださり升なこれ〜三作何のマアわが身が殺しはしや  
 るまいどう云ふ間違じやちやつと云譯してたもひのう 淨「突出せば顔振上 三「成程杉松が  
 訴人の通り鹿殺したは私でムリ升 雄「ア、是々々わが身は氣が違やせんかや滅相なく〜必  
 ず狼狽た事云やんなや 三「イ、エ狼狽は仕升ぬわしがでに仕た事をば覺へもない仲間の衆  
 に吟味が掛つてひよつと何うした人違で〜様の難義も成らうも知れ升ぬぞや 雄「ヤア、ト  
 思入〜 三「夫が悲しさに尋常に名乗て出るのでムるわいの常々お前の咄しにも今の〜様  
 は義理有る親じや程に随分大切に孝行にせいと云はしやつたを私しやよう覺へて居升わい  
 の 淨「私が仕置になつた跡で〜様の泣うしやれぬ様に 三「京の町へ奉公にやつた 淨「と  
 云ふて置て下され 三「是から杉松を私と二人前可愛がつて下され鹿や兎の命を取ばどうで  
 末は斯なる者賣てアノ杉松斗りは狩人にさして下さるなや 淨「夫ばつかりを頼み升 三「噂  
 様去らば 淨「親の代りに罪科を引受る氣の立派さを思ひ合せてハアはつと今更未練な留め  
 櫛もあらがい様もないじやくり 雄「扱も〜我子乍らも耻かしい義理の有る後の親の爲じ  
 やとて健氣など云はうか發明など云はうか大事にせい大切にしやと云ひ聞かした私はまた  
 エ、思は送らぬのにおととも及ばぬ孝行な事よういふてたもつたのう一生の智慧も壽命も

十三年に縮めたのか 淨「こんな利口な子を持たとひけらかしたい稀な子の 雄「世にも稀な  
 大垣の土の中へ生ながら石子詰めて殺すとは 淨「何ば前世の約束でも餘りむごい約束事  
 雄「イヤ〜何方でも殺さぬ〜 淨「我子にしつかどしがみ付涙の瀧に濕るにぞ最を喰い入  
 るしぱり繩 衆「ヤア成敗極る科人に返らぬ繰言併し今晚中は寺の法事明六ッを撞くを相圖  
 に成敗は山本の土中の堀て石子詰の刑罪最早七ッ時六ッ迄は今一時時刻が移る科人を引立  
 い 淨「見返る姿霧霞飛が如くに引立行く母は正体腰も抜け 雄「ヤア三作 淨「思へば〜今  
 日の日は我身一人の悪日か 雄「由緒正敷武士の子を一生狩人山がつにも 淨「朽果さする斗  
 りかは 雄「所の法に行はれ非業の最期は殺生の 淨「罰か報ひか悲しやと土邊にハタと身を  
 打付聲をはかりのこがれ泣愁ひを拂ふ玉簪如何な大事も好物に酔ふてはころり芝六が機嫌  
 上戸のちろ〜戻り 芝「ヤア女性是におわするか此冷へるのに土邊にころりはハア扱はる  
 もじも聞こし召たの酔覺迄のうたゝ寐か如何様下戸ならぬころ女はよけれ女がよければ我  
 等もよいじやつちもよかれこつちもよかれ去らば酔比らべ致さうかコリヤ噂よ目を覺せ  
 淨「と手をとれば 雄「ヤアこちらの人の 芝「チ、こちらの人じや 雄「ハア「ト大泣き」 芝「南無三  
 きやつ泣上戸に成たか我等は又悲しうても笑ふのに貴様は目出度ても泣くとはハア嬉し泣  
 きじやなイヤ又此様な嬉しい折柄祝ふて一ッ泣き給へ 淨「手を取れば 雄「エ、こな様はの



ふ「ト急度いふて泣」芝、何じや其顔付は腹立るのか泣のか譯が知れんわい 雄、如何に日頃の好物じやて、さつきの程「ト思入有て」芝、エ、さつきの御馳走を無にして外で飲で戻たのでか 雄、イ、エイなア三作がな 芝、何とした 雄、可愛やたつた今 芝、何所へ往た三よ何所へ往た三は味噌買に往たか「トお雉は身を揉み泣く芝六酔ふたるこなしにて」芝、コリヤ三作よ喉よ中直りせにやならんマア五合買て来て呉れよ作よ「ト呼ぶ」雄、エ、こな様はのうコレ其三作はの 芝、何所へ往た 雄、サア三作はの「トいひ兼るこなし」芝、明日夜が明るが最期 雄、エ、「ト泣く芝六顔を覗いて」芝、何にも泣事はないあしたの明六ッを打が最期えらい出世コリヤ坊主よ我もあしたからは二本極めさすはるいかく何と目出度いぞよくハテちよつと來いで引立られて往た所がさりと譯濟で戻る目出度い酒何とかみきを上げたも無理じや有るまいがな天道様拜み升せく 雄、ム、ろんならあなた方をおかくまひ申さんといふ言譯は 芝、チ、立たく立たに因て寐よふといふが何と誤りでい有るまいがなサアくお出く「トお雉を引立る手を振り切る」芝、チ、明け六ッになれば坊主めが出世と噂果報は寐て待てじやそこ許れ否なら名代に坊主めを抱て寐るはヤアとろり「ト杉松を連れ蒲團の中へ這入る」 雄、こつぱり冠る蒲團より早とろくの草臥寐入り 雄、何にも知らぬ悦び寐顔夫といふたら三作が心も無足に夫の命夫も悲し我子も可愛し 雄、心は

千々よ鳴鐘と早撞出す興福寺「ト本釣鐘を一ッ撞くお雉恠り」 雄「あの鐘の數に縮まる我子の命 雄「一つの命を」ト又鐘を撞く」 雄「二つに分け養ひ親への孝行 雄「褒めて遣て下され 雄」といふもいはれぬ女房が心の苦痛「ト又鐘を撞」 雄「三つ」ト又鐘を撞く」 雄「四つ重て響く胸先は斧鉞に撃る、心地五躰」ト又鐘を撞く」 雄「五ッにいつの世の報ひを爰に修羅の鐘打切る六ッ」ト又鐘を撞き終はる」 雄「我子の知死期ハ、ハ、 雄「ワツと叫ぶと一時に蒲團の中も血の涙寐入り臥たる稚子の咽笛疊にぬうたる刃 雄「ヤア杉松をむごたらしい醉狂ひも事によるわいのう 雄「涙も一層狼狽へて咽へ流る、呆れなき芝六居直つて聲を上げ 芝「恐れ乍ら中將淡海公へ言上仕らん」トメリヤス」 芝「斯く下賤と成下りし故玄上太郎が心底を御疑ひ遊ばされ最前の捕手は私か心を引玉ふ廻し者と氣を付乍ら情なや人質に心迷ひいよく以て御疑を重ね暫時も爰には置玉はし偶々身の冥加に叶ひ君をかくまい奉る身の大慶も水の泡 雄「勘當御免なき時は生ても死でも返らぬ心外忤を殺害しても他言致さぬ魂を今改めて御覽に入ひこりや女房斯迄張詰し太郎が義心を見損じさせ玉ひしも三作と云ふろなたの連子以前は泰の益勝と云ふ樂官の妻蝦夷が讒言にて没收せられし家名力と成て再び取立下されと余義なくも頼掛られし後妻の義理有る忤が枷となり淡海公に某が心根を見下されしが口惜さに刺殺したと二人り中に出生した此杉松科はないけれど主人への面晴



れ鬼に成て 淨と酔はぬ酒に酔た顔酒でいなうて劍をのみ侍の義理が敵じやと 芝思ひ諦め坊主めが代りに随分兄を養育してこりや可愛がつてやりやいの 淨どうと座して泣けれど 雄ア、是夫程迄に義理を立て下さんす其兄の三作が鹿殺しの科人に成て縛られていたわいなア 芝ヤアくくスリヤれれが科を身に引受けて名乗り往たか夫やつての義理が立ぬわい 淨駈出す弓手の岩壁に 金驢ヤアくく玄上太郎利綱暫らく待て 芝何と 金内大臣藤原の鎌足家臣金輪五郎今國が中間す子細有り心を静めてマアくく待て〔ト芝六平伏する〕淨神事の禮服小忌衣心梅が香残る采女の局悠然と出て玉ひ〔ト道具上手へ引く〕金恩愛に迷ひ未練の心ざしも有んかど疑念の晴す淡海公のか指圖にて誠の心底儘に見届けたり我餘所乍守護する君一口にても其方が家に御難をさけしは適れ忠臣神妙く 芝ハッスリヤ某が心底は 采女始終の様子を聞くに付てもいと痛はしの夫婦の者天地の間に生を受し者親子の哀れ知らざるものあらんや如何に忠義故とは云ひ乍ら不便の者じやよなア 芝すりやあなた様は身まかり玉ふ采女の方様とな 雄夫にマア麗はしいアノお姿は 金チ、訝かしきも理り入鹿が邪まの戀慕を遁れん爲に久我之助に言合せ采女の方の猿澤の池へ入水と披露なし此興福寺の山奥に今國を供し隠れ住み今日斗らす汝が倅大垣の刑に行ふ所不思議の一命を助かつたり三作參れ 三ハア、淨上下改め静々と携へ持し寶の箱明て我

子の無事を顔〔ト三作鏡の箱持出る〕 芝ヤア三作 雄よう無事で居てたもつたのう 淨思ひ掛ない夫婦が悦び 金チ、不審は尤君御惱の祈りの爲天の岩戸の古例を引天照大神に祈誓を掛百日の行滿る今日争ひ難きは正に神力刑罪の地を掘り鑿つ土中に怪き光物よくく見れば先年失せ玉ひたる寶の御箱扱は入鹿が父蝦夷大臣疾くより謀反の根ざしにて埋め隠せし二色の寶顯はれしも是正よ神明の助け玉ふ三作が一命今改め我君が二代の忠臣と武名を上げ得させん去乍ら鹿を殺せし春日の掟も破られまじ幸ひなるかな同じ血筋の弟が死骸を土中に埋め刑罪の表を立て菩提の爲ゑるしの石の其上に撞鐘一字は我君に申上げ建立致し吳うぞよ 淨詞は今になか月の 金六ツに死したる七ツ子の數を合して十三鐘名づけ得させん 雄すりや此三作が代りよ 芝此世を杉松が 雄たつた七ツでと、様の役にも立つて 芝父が不興も晴々と武名を残す 雄此曉の 芝六ツと七ツの〔ト顔見合せ泣〕 金數を合して十三鐘 淨音にぞ哀れ残しける今國重ねて 金斯く二色の御寶手に入る上は我君鎌足公へ捧げ奉らんイヤ我君御出座願ひ奉る〔ト内にて〕 皆々〔御出座〕ト時の鐘になり〔淨〕聲に應じて淡海公御手を執て立出る折柄向ふ寶の光り旭の影に輝きて〔トさるく〕にあり鎌足目の明きしこなし皆々見て 淡忽ち御目明かにならせ給ふは 雄是も偏に寶の徳 金各万歳を唱へ召され 皆々千秋万歳お目出度う存じ升 鎌ヤアくく利綱汝が射止めし爪黒



の鹿は入鹿を調伏やがて天下大平ならん 鎌今日出陣の城廓に 淡悪魔追伏 金興福寺は  
 稚き者が法の道 鎌我藤原の氏の寺 大在イヤ是をすくに 鎌打立ん 鎌先を拂つて鎌足  
 が威風凛々凛然と勇む心も芝六が 金妻をふ雉子や 芝子故の闇 淡明ても闇さ 雉六ッ  
 智々七ッ 鎌較を合して十三鐘 鎌十一十二十三鐘の古跡を今に 「ト采女淡海大納言右大  
 辨芝六三作宜敷並ぶ鎌足先に立ちお雉杉松が死骸を抱へて見せる芝六顔を脊ける」 雉是  
 ト泣落す「ハア、淨傳へける」ト宜しく段切にて幕

三幕目口 花渡しの場

役名

- 一後室 定高 一鹿嶋 事觸 一入鹿 大臣
- 一荒牧 彌藤太 一粟島 大明神 一大判 事清 澄
- 一六齋 念佛 一施餓鬼坊主 一仕丁 二人
- 一竹本岩五郎太夫 一宮越 玄菴

遺物平舞臺見附輪子形の襖大欄間をわろし都て定高館の体爰に彌藤太玄菴仕丁二人並び居  
 て幕明く 彌藤太「コリヤ仕丁共今日は入鹿公お目出度のお悦に奈良の町へ入込の諸職人商  
 人藝者共へ受領を下されんとの御談なんと有難い義では無いか 仕丁「左様でムリ升 玄今

朝より残らず相詰り居る者一人づゝ呼び出だせ 仕丁「ハア受領望の諸職人藝者共一人づ  
 一出升せう 事ふた「ハア 淨照瑠「ハツと答へて烏帽子に白張彌藤次屹度見 玄見れば烏帽子  
 白張其方は神職じやな職の官位受領は吉田の捌きなせ吉田へは参らぬぞ 事彌「イヤ拙者め  
 は鹿島の事觸でムリ升る 彌何鹿嶋の事觸じや事觸ならば當年の吉凶よく存じ居るで有う  
 な 事「イヤモウ夫を申が私の役目則當年は辛の卯の年祟り年だともつて鹿嶋の御寶殿より  
 でつかちない光り物が飛出し神の扉が八文字に披らけ神馬の四足に大汗をかいてムる彌宜  
 神主是を歎き御湯を捧げて七座の齋み時にお鹿島の御託宣に氏子共が下用櫃にしやりを切  
 らしてひらつぎをするであんべい人の物でも手廻り次第打殺して其日を凌げむくりこくり  
 地の底より潤りして米は下直に錢は高うさしてやんべいとの御託宣でかんじやり申そ味噌  
 薪代迄も拂らひ給へ清めてたもふ 淨としやべりける 玄「ホウお成鐵砲託宣向後そちが受  
 領は鐵砲差出の頭左平治と名乗つてよからう 事「エ、有難うムリ升る受領を受け升た御恩  
 徳に随分借金の出来ぬやうに十日め廿日め拂ひ玉へ清めて玉ふ 淨「訛りちらして歸りける  
 三人連れの道心者荷物かたげてつかく」と 彌「ヤイ〜見苦しき雜物をかたげ出家の身で  
 是へ来るは上人和尚に成りたい望みか 六オ「イエ〜愚僧は願人坊でムリ升る 玄「願人と  
 は何の事じや先づ宗旨は何宗じやぞ 六「何と八宗九宗をもれ二季の彼岸はコレ〜此やう



に鉦太鼓で町々を六齋念佛でムリ升る 粟島又愚僧は是此箱をコウ立かけて○丑寅の御年は一代の守り本尊厄病難を助け玉ふ粟島大明神への代僧代参り「トへいをふる施餓鬼坊は鏡鉢を出し荷箱に赤紙青紙の幡を立掛けて」セガキ愚僧は盂蘭盆精靈祭に下々を法界の施餓鬼御世祖の供養流れ灌頂法界の施餓鬼○とやりかけ升 六ろこで愚僧は此太鼓を「ト擗へ」六「やアあんやうりうしく」あつてんりうたん金銀花咲た「ト太鼓打粟島と施餓鬼は右の太鼓に合せ叩鉦うつ事 六擗七月廿四日には地藏菩薩を脊たら負ひ○一ツや二ツ三ツや四ツ十より内の嬰兒は小石を拾ふて塔を積み一重積では親の爲二重積んではさやうり兄弟我身の爲め 粟擗は又六齋の庚申に「○此銅羅を打かけて○庚申の代待○お志はムリ升せんかな 六擗とんと代呂物が切れると錢四五文を錫杖にしてヤレ奇妙頂禮○ヤレくくく」願様一から六まで五ぬけにこつたら因果な五が出て益さぐるめにころりと取られてあんまり寒さに唄めが湯もじを被て寐たればどうやら天窓がらよんがるやうなホウ、 六ハテ色々變化な宗旨じやなア 粟ろこで愚僧共を出家では七變化杯と異名を付け升るでムリ升 六べつとして春に成れば人の心も長閑に我々が錢儲けサア何れも 六粟合點じや「ト花箱より傘菅笠團扇竹を出し」 六正月の末から六月晦日迄は住吉師コレ此やうに拵らへて○四社の御前で扇をひろふた「ト二人踊る」 六扇めでたや末繁昌 六粟「ヤア住吉様の岸の

姫松めでたさよ 三人「はんじやア」ト三人色々有る 彌是の中々心勞な宗旨じや 粟御意に入り升たらば寺号を下さり升せうならば 三人「有難たらムリ升る」ト竹叩いていふ 彌「ホウ望に任せ向後曉山西方寺とおゆるし成さるぞ 三人「ハア有難うムリ升る 淨悦び勇んで入る跡へ 上るりかたり」ハイ御免るされて下さり升せ私に淨瑠璃太夫でムリ升るぞうぞ大椽の号を下さり升せうならば有難うムリ升る 六何淨瑠璃語り藝者とな 上「左様でムリ升る 六夫の幸ひ終に外を見ぬ奥女中淨瑠璃遊藝は殊の外望お上にもお慰みの爲一曲所望じやく 上「イヤ是は藝者冥加に叶ひ升た儀でムリ升るお望とムリ升れば相勤め升せうかな○ハア何がよろしうムリ升せうぞ先づ宇治川の先陣も古るめかしい駒太夫場の流しの枝でも有るまい島太夫がうしくの新座敷にせうかイヤ」世話事は時代に合んいつる春太夫があいこの道行 彌「よかるう」 上「いつる氣を替へて所作事をか目にかけ升せうかい 彌「夫の一段所望」ト是より何にても所作事有て 彌「出來た」望みに任せそちか岩子のかんといふ字をよけに改今日より岩五郎太夫と改めてよからう 上「へ、岩五郎太夫とは○どうやら長いやうな名じやがエ、岩が苗字で五郎太夫が名でムリ升るな 彌「チサ、其苗字と名と一ツに讀み下せば 上「岩五郎太夫○でムリ升するな 彌「ハテ知れた事を 上「エ、有難うムリ升る 六望叶ふ上は早く退出」ト仰山に云ふ」 上「ハア、淨瑠璃」ハツと悦



こび歸りける 内々大判事清澄參上 彌大判事參上と云 兩人「此通り言上せん」ト奥へ這入る 淨「何れも白洲を立出る召に應じて大判事清澄袴のびたも角菱有る不和成る中の定高が屋敷互に夫と白書院自禮もせずつゝと通り 大判事「お召について清澄參上いたしたたろ案内 淨「言ひ捨て行かんとする定高聲かけ 定高「ヤレ待た清澄殿暫らく〜武家の禮儀御存なくばナト御傳授申せうかな 大「ハア、入鹿公のお召によつて參上せり女童に用無ければ挨拶する口の持たぬわい 定「イヤさう仰有れば猶申さしや成升せん 大「何を小癩な淨「互に折れぬ老木の柳松の間の襖開かせ 入鹿「扣へおらう 二人ハッ 淨「はつと二人は飛しさり恐れ入たる斗り也威勢を頭にのさばり出たる其粧ひ入鹿大臣見下す眼くわん〜と入「ヤア大判事政道は我儘なる此入鹿今日より悔つて後悔致すか 大「何しに鹿畧に存じ奉り升せう 入「其鹿畧に思はぬ者が今朝よりの使何とて今迄遲参いたした緩怠な奴の 大「道は存じ寄らぬか疑ひ某が領地南海の咽首なれば大切の所と油断なく晝夜弓を張り矢尻を磨き屹度守護いたしムり升る 入「イ、ヤさうは扱けさせぬ采女の有家は大判事おん身が能く存じ居る事 大「道は思ひよらぬ御難題其采女の御方は 入「ヤアとぼけな大判事うちが倅久我之助は采女が付人其方が知らぬとは云はれまい 定「お聞有たか清澄殿近かしき親子の中で御存じないとは申されまいがのサア覺有らば眞直に白狀召され 大「イヤ黙りめされ大切

の儀女のおし出る所でないぞ 定「イ、ヤ入鹿公の命を蒙つての詮議御返答の有無に因ては其座は立し升せぬぞ 淨「膝立て直し詰寄て双方挑み争ふたり 入「ハ〜ハ〜工んだり拵らへたり此入鹿が詞の尾ふ付き女の身のいらざる詮議立定高が領分大和の妹山清澄が領地の紀の國の背山隣國境目の論に因り互ひに確執とは表向の見せ掛け内々には申合せ心を通はす事あらんと詮議を申付しは互の論にかのらが所存を探らん爲め定高うちも疑ひ掛るぞよ 定「是は君のお詞とも覺升せぬ夫少貳が不和なる大判事殿何故申合せ升せうぞ私に迄か疑とは恐れながら我君のお眼鏡が違ひ升かと存じ升 入「いふなく〜左程音信不通の大判事が倅久我之助とそちが娘雛鳥とはなせ密通してゐるぞ 定「イヤ其儀は 入「知るまいと思ふか 日外春日明神へ代參の折柄時雨を凌ぐ雨舎りしつぱりとした二人が濡れ事此入鹿が篤と見届け置いたわい 定「エ、入「何んと肝にこたやうがやかのらが倅娘の縁ふ繋かれ親々共が馴合の吟味杯とは後ろ暗い兩人何と言譯あるまいがな「ト大判事立うとする」 淨「飽迄邪智の一言も何思ひけん大判事席を蹴立て行かんとすぞかさす定高が刀の鑑むづと取り 定「まつた清澄殿屹相變へてコリヤ何國へムるな 大「知れた事親々が不和なる中を存じながら忍ぶ倅が不所存引捕らへ詮議致す 定「アノ御子息久我之助殿を 大「チ、サ子供が縁を幸ひに和陸せしなんど舌頭にかけられては某が家名の耻辱 定「チ、ろりや此方も同じ事一旦は



武士の意地今更中が直したいとてわざと娘に不義しかけさせし杯と世上の人にさみせられ  
ては過ぎ行れし夫へ立ぬこな様より先へ私が 大「何を女の知つた事でない退きやれ 定」な  
らんくなり升せん 入「ヤア私の論に立願ぐ尾籠者そら達が悴の不義の吟味はせぬ磨の尋  
ねは采女が有家サア兩人何れおらなりとも早く言へ 大「イヤ悴が所存はイヤ知らず采女殿  
の儀は嘗て以て存せぬ若し詞に偽り有らば弓矢神の御罰を蒙り奉らん 淨」刀すらりと抜き  
はなし丁々と金打し 大「サア此上にもお疑ひ有らば如何様の拷問なりとも仰せ付られい 定」  
チ、妾とても少貳が妻家にかへて采女の方かくまひは致し升せん若しお疑がはしく思召さ  
ば水責火責譬ひ如何様の責苦に逢ひ升る連知らぬ事はいつ迄も知り升せんぞ 淨「詞鏡どに  
いひ放す 入」然らば采女が詮議は追ての事併し兩人共に面晴れなれば采女をかくまはぬと  
いふ潔白に兩人へ改めて中附ん 大「ハア改めて上意とは 入」定高采女の事存せぬといふ申  
譯に娘雛鳥を所望せん 定「エ、 入」大判事も覺ぬなきに相違なくば久我之助を今日か出勤  
させよ 大「スリヤ悴久我之助も 定」娘雛鳥も 大「定」上意とな 入「兩人共に急度申渡したぞ  
大」斯く有難き上意を「ト櫻の折枝を一本づゝ渡す」定「若玄互に子供が 大」違背致さば 入「  
則大罪○眞此通り○ 淨」生置く櫻の枝追取り 入「兩人共得心すれば榮ゆる花背くに於ては  
嵐にあたり落花微塵「ト枝を打付る花散る仕掛け」 定「大判事殿には子息の詮議仕ぬき召る

か 大「出勤させて見せう○がおん身も見事息女をば 定」差上て見せ升せう 大「見るぞや  
定」見せるぞや 大「サア 定」サア 二「サアくくく」と言葉つがふたぞや 入「ヤア無益  
の争ひ生死の返事は暮れ六ッ限り 兩人「ハア○然らば是より 入」兩人急げ 兩人「ハア、 淨」  
打連れてころ「ト三重双方引ばりよろしく暮

三幕目切 妹山脊山吉野川の場

役 名

一大 判 事 清 澄 一後 室 定 高 一 姫 小 菊  
一一 子 久 我 之 助 一 娘 雛 鳥 一 姫 桔 梗

造物上手に二重の上は風雅なる亭座敷様側附手水鉢此傍に柏の木二重より舞臺前へ岩組の  
段あり下手やはり二重の上に座敷本様附籠の段一式飾り舞臺櫻の立木二重より花道附際  
へ岩組の段あり両家体共前側に塗骨障子入あり真中吉野川此向ふ妹山脊山櫻花盛りの遠見  
後に雛道具を川向へ渡す詠らへあり舞臺前流れの浪手摺上下出語り臺空より櫻の釣枝都て  
吉野山の体にて幕明く 西「淨るリ」古への神代の昔山跡の國は都の始にて妹春の始山々の中を  
流るゝ吉野川妹山は太宰の少貳國人の領地にて川へ見越しの下館脊山の方は大判事清澄の  
領内子息清船日外より爰に勘氣の山住居経讀む鳥の音も澄て心細くも哀れなり「ト上手前



側の障子開らく久我之助机に凭かり居る 東澤「頃は彌生の初めつ方こなたの亭に雛鳥の氣を慰みの雛祭り」ト下手前側の障子開らく雛鳥姫皆々雛を飾り居る」桔梗「ノウ小菊殿いつものお雛様は御殿でお祭り成されるれどお姫様の御病氣故此山岸の仮座敷で出養生谷川を見はらして櫻の見飽き雛様も一入お氣が晴れて善からうこちらも追付よい殿御を持つたら常住あのやうに引付いて居たら嬉しからうの 小菊「桔梗殿の何言やる何ぼう女夫並んで居てもあのやうに行儀に畏まつて計りゐて手を握る事さへならん窮屈を戀路はいや 桔梗「其上肝腎の寐る時は 澤「別れくの箱の内 小「思ひの絶ゆる間は有るまいぞいのホ、、、澤「仇口にも雛鳥の胸に當りの人目さへ 雛鳥「つらい戀路の其中に親と親とは昔より御中不和の關となり 澤「逢ふ事さへも片糸の結ばれ解けぬ我思ひ 雛「戀し床しい清船様 澤「此山居れ共山と山とが領分の 東澤「境の川に隔てられ 雛「物言ひ交はす事さへもならぬ我身の儘ならぬ 東澤「今は中々思の種いつる隔て、戀ひ侘る 雛「逢はぬ昔がましどかし 東澤「切なる思ひかきくどき歎けば俱に 小「お道理でふり升る本にひよんな色事で隣り同士の紀伊の國大和御領分のせり合で 桔「お二人の親御はすれく雛鳥様と久我様の妹脊の中を引分くる妹山脊山船も筏も御法度でたつた此川一つツイ渡られそうなもの小菊殿瀨踏して見や

らぬか 小「チ、滅相な此谷の逆落し紀州浦へ一てきに流れて行たら鮫の餌食シタが申し雛鳥様お前の病氣をお案じ成され此假家へ出養生さし成さつたは餘所乍ら久我様にお前を逢す後室様の粹な御捌き女夫にして下さり升せと直にお願遊ばしたらよもや否とは 東澤「岩橋の渡る事さへならずともせめて遠目にお姿をと障子ぐわらりと椽端よ覗き溢ぼる、お共西澤「久我之助は鬱々と父の行末身の上を守らせ玉へと心中に念悲觀音の經机案じ入たる顔形 雛「アレく机もたれて久我様の物思はしいお顔持 小「お瘡でも起りはせんか 雛「エ、お側へ行たいコレ爰に居るわいな 東澤「言へを招けと谷川の漲ざる音に紛れてや聞ぬつらさ 桔「エ、辛氣本にこちうら思ふやうにもない 小「コレちつとこちらも向いて見たが善いわいなア 東澤「あせるお傍に氣の付々 雛「本にそれよ口で言はれぬ心のたけ〇 東澤「豫て認め奥山の鹿の卷筆封じお戀し小石を括り添へ女の念の通せよと祈願を込めて打磔からりと川に落瀧津波にせかれて流れ行 雛「エ、鈍な心の念は届いても女の力の届かねば思ふた斗り片便り 東澤「返事を松浦佐用姫の石になりとも成たいとひれ伏山の甲斐もなき西澤「久我之助は川へ目を付け 久我「ハテ心得ぬ何國かかは水中に打たる石は重ければ逆巻く水の勢に沈みもやらず流るゝは〇、入鹿といふ逆臣の水の勢には敵對難き時世の習らひ夫れと悟りて暫時の内敵に随ふ父大判事殿の心は善か 西澤「悪かを三ッ柏水に沈むは願



ひ叶はず浮む時は願成就吉野を假の御被川太神宮へ朝拜せん柏の若葉摘み取て谷を傳ひに  
 水の面 東淨「見やる女中が 小」モシ／＼今の小石が届いたか久我様か川へ下りなさるゝあ  
 の岩角の折曲りが川がいつち狭ひ幸ひの善い逢瀬 東淨「云ふに嬉しく雛鳥の飛立斗り振袖  
 も裾もはら／＼坂道を折から風に散る花の櫻が中の立姿しどけ難所も厭ひなく 雛」ヤア久  
 我之助様か 東淨「おなつかしうムり升たわいなア 西淨「言ふに嬉しく清船も 久我」雛鳥殿  
 無事で 西淨「顔と顔見合す計り暮間の 東淨「心斗りが 西淨「抱きあい 東西淨「詮方涙先立て  
 り 雛」申清船様私しやお前に逢ひたい計りに病氣といひ立爰迄来て居れど 東淨「親の許さ  
 め中垣に忍んで通ふ事叶はず〇 西淨「女雛男雛も年に一度は七夕の 雛」逢瀬は有るに此や  
 うかお顔を見乍ら逢ふ事の 東淨「成らぬは何の報ひぞや妹脊の山の中を隔つ吉野の川に鶴  
 の橋の無いうと口説き言 西淨「聞く清船も楫有ば早渡りたき床しさを胸に包みて 久」道理  
 々々我も心は飛立てど此川の法度厳しきは親々の不和斗りでぢい今入鹿世を取て君臣上下  
 心々隣國近邊と雖も親しみ有らば徒黨の企て有らんかと互に通路を戒めて船を止めたる此  
 川は領分をわけける關所も同然 西淨「命だに有からば又逢ふ事も有るべきぞ今流したる水の  
 柏 久」涙にもまれて浮ひしは心の願ひ叶ふ知らせ 西淨「入鹿が旋殿しければ我も世上を憚  
 りて此山奥の隠れ住み鶯の聲は聞けども籠鳥の雲井を慕ふ身の上を 久」思ひやられよ雛鳥

殿 西淨「儘ならぬ世を恨泣 雛」ノウ又逢ふ事も有うかと別るゝ時の捨詞たどへ未來の父上  
 に御勘當受けるとも私しやお前の女房じや逆も叶はぬ浮世から法度を破つて此川の 東淨「  
 早瀬の涙も厭ふまじ 雛」何國如何なる方へなと連れて退て下さんせ私の其處へ往き升る  
 東淨「既に飛込む川岸に遠て驚ろき止むる姫 小」ア、申しお危なうムり升る 特」マア／＼お  
 待ち被成升せ 雛」イヤ／＼放しや／＼ 東淨「泣き入る娘 久」ヤレ短慮なり雛鳥殿山川の此  
 早瀬水練を得たる者さへ涉り難き此難所忽ち命を失ふのみか母後室に歎きをかけ我にも彌  
 々憎しみ掛かる科に科を重ねる道理必ず早まり召れな 西淨「制する詞一筋に 東淨「思ひ詰  
 めたる女氣も今更弱る折ころ有れ 西内より」大判事清澄様御入り 久」何親人の御入來とな  
 西淨「ハット驚く久我之助歸るを名残り 東淨「押し止むるも我身を我身の儘からずコレノウ待  
 ての聲斗り 東内より」後室様の御出 東淨「泣く／＼廬の打萎れ登る坂さへ別れ路は力難所を  
 行心地空に知られぬ花曇り 西淨「花を歩めど武士の心の險阻刀して削るが如き物思ひ思ひ  
 逢瀬の中を裂く川邊傳ひに大判事清澄 東淨「こなたの峯より太宰の後室定高にろれと道分  
 けの石と意地とを向ひ合ふ川を隔て、 定高」大判事様お役目御苦勞に存じ升 東淨「聲襦を  
 かいどりの夫の魂放さぬ式禮 西淨「清澄も一揖し 大判事」ホウ早かりし定高殿御前を下かり  
 しも一時參る所も一ツなれども此脊山は身が領分妹山はろこ元の御支配川向ひの喧嘩とや



ら互に睨らみ合ふて日を送る此年月心解るか解けぬかは今日の役目の落付次第狼狽へた捌き召さるゝな 西澤「目尻くしやつく茨道 東澤「脇へのはして 定「仰の通り入鹿様の御説意はか互に子供の身の上受合ふては歸り乍ら身腹はわけても心は別々もしアイと申さぬ時はマアお前はどうせうと思召へ 大「知れた事御前で承つた通り首討放す分の事サ不所存な悴は有て益なし無くて事缺けず身の内の腐りはそいで捨てるが跡の養生畢竟親の子のど名を付るは人間の私天地のら見る時は同じ世界にわいた蟲別に不便などは存じ申さぬ 定「ハチきつい思切り私は又いかう了簡が違ひ升女の未練を心からは我子が可愛ふてくゝなり升せぬ其代りにお前の御子息様の事は眞實なんとも存じ升せぬ只大切なは此方の娘忝ない入鹿様のお聲の掛つたこそ身の幸假令娘がどう申升せうとも母が勤めて御殿へ上げ御臺様と多くの人に敬ひ侍しづかさうと思へば本にマア此様な嬉しい事はムり升せぬホ、ホ、 東澤「と空笑らひ 大「ム、シテ又得心せぬときは 定「ハチろりやモウ是非に及升せぬ枝より悪い櫻木は切て接木を致し升せねば太宰の家が立升せぬ 大「チ、さうあくては叶ふまい此方の悴逆も得心致せば其身の出世榮花を咲かす此一枝川へ流すが知らせの返答盛りながら流るゝは吉左右もし花を散らして枝斗り流るゝならば悴が絶命と思はれい 定「いかにも此方も此一枝が娘が命の生花を散らさぬやうに致し升せう 大「チ、サ今一時が互の瀬とし 西澤

「此國境の 東澤「生花の境 大「返答の善惡に因て遺恨に遺恨を重ねるか 定「又是迄の意趣を流して中吉野川と落合ふか 大「先づ夫迄は双方の領分 定「お捌きを待て居り升 大「チ、東澤「詞ろばだつ親と親 西澤「山と 東澤「大和路別れても 東西澤「替らぬ把の路恩愛の 東澤「胸は霞に埋もれし廬の内に別れ入る立派に言ひは放しても定かに知らぬ子の心覺束なくも呼子鳥 定「娘々雛鳥く 西澤「アイ 東澤「音なふ初音雛鳥も母の機嫌をさし足に 西澤「母様今日はお目出度う存じ升 東澤「武家の行儀の三ッ指に固い程猶親子の親み 定「チ、能う飾りが出来升たそなたの顔持も善さうで一入目出度いくゝ母も祝ふて獻上の此花お雛様へ供へてたも幾つになつても雛祭り嬉しいもの女ども何なりとも娘が氣に合ふ遊びをして随分勇めてたも 東澤「何時も勝れし後室の機嫌は訴訟よい出汐 小「今のをちやつと言出して御らうと升せ 東澤「と秘に腰押されても兎や角と言ひうゝくれの纏つれ髪 定「イヤノウ雛鳥脊たけ延びた娘を親の傍に引付けて置くは結句病の種それ急に思案を極めろなたに善い殿御を持たさうと思ふが嬉しいか 西澤「エ、 定「ハチ氣遣ひ仕やんを可愛い娘の一生を任かす殿御ろなたの氣に入らぬ男を何の母が持たさうぞナアこし元共 二人「ハイくゝ左様でムり升か氣の通つた後室様嫁入りの先は大方今のナこがるゝ君でムり升せう 東澤「押推量も得手勝手誰には縁を組紐に胸は深紅の塞がる箱取出し 定「妹脊を並らぶる雛の日は嫁入



の言口是此箱の主こそそなたの殿御幸ひ有合ふ雛の御前で夫定めユレそなたの夫と云ふは誰有う入鹿の大臣様じやわいのう 雛エ、そんなら私を嫁入さすとは 定チ、太宰の少貳が姫雛鳥美人の聞へれ聞に達し差上よと有難い上意 雛エ、東海ハット恠りうろくと詞は涙ぐむ斗り 定チ、恠りしやる筈驚きは尤も我々風情が口にかけ夫と言ふも怒多い君を掣にとる家の面目凡そ日本國に此上のない嫁入の随一そなたの果報な娘じやのう「ト雛鳥身を揉て泣く」定チ此様を日出度の事が有うかあア姫共 小イヤモウ日出度いと申升せうか 二人いつろ亂騒ぎでムリ升「ト辛氣なこなしにて這入る」東海工合違ひの嫁入小菊も桔梗も投首の皆々小腹立て行母の心も色々に咲分けの枝差出し 定親の許さぬ徒づらは阿つても返らず一旦思染めた男いつ迄も立て通すが女の操破りやとは云はぬが貞女の立てやうが有さうなもの篤りと思案をしや此花の八重一重互ひよ不和なる親々の心揃はぬ二ツの花一ツの枝に取結び切り離すにも離されぬ悪縁の仇花今そなたの心次第で當時盛んの入鹿大臣の深山下ろしに吹散らされ可愛想に久我之助は腹切らねばならぬぞや 雛エ、定チ其驚きは道理く太宰少貳が娘美人の聞へ差上よと入鹿の難題又雛鳥と縁を切て降参それば清船も命助ける印は川へ流す櫻散るか散らぬか身の納り時に隨がひ風に靡びき君が手活の花になれば八重も一重も恙なう侍しづかるゝ互ひの幸ひ戀しと思ふ久我之助助けやうと

殺さうと今の返事のたつた一ツ貞女の立やうサアく見度いく 東海戀も情けも辨へて義理の柵せき止めて涙せきあげくながら 雛母様段々 東海聞分升たお詞は 雛背き升せぬわいなア 定チそんなら得心して上つてたもるか 雛アイ「ト泣く」定チ、嬉しや出かしやつたく夫でこそ貞女なれ〇とはいふものゝ慣れぬ御殿の宮仕へ武家の娘と笑はれてたもんな今日より髪も改めすべらかし祝ふて母が結び直してやり升せう 東海いろく立つは立あがら娘の心思ひやり別れの櫛の墓なさも解きはどかれぬ愛さ思ひ 西海重き春山の廬の内に父が前に謹んで「ト東の方は髪すきになると西の方は障子を明ける」久我之助が心底聞し召分けられ切腹御赦免下さるゝ事身に取ていか斗り大慶至極 西海と手を突けば黙然たる大判事稍々打濕るむ目を開らき 大今朝入鹿此大判事を召され鎌足の娘采女身を投げ死したりとは偽り其方が悴人知れぬ方に匿まい有との難題元より知らぬ大判事能くく思へば采女の御難を救はん爲猿澤の池に入水の体にもてなし密かに落とし参らせしは中々久我之助が智恵でない誰か忠義の者の指圖ならんと知たは身も今日が始めて親にも包み隠せしは大事を洩らさぬ心の金打若輩者には神妙の仕方ハア、出かしたりと思ふに附け邪智深き入鹿久我之助が降参せば一命を助けん召連れ來れと情の詞で釣り寄せて拷問にかけん謀事責め殺さるゝ苦しみを切腹さすれば君の御爲何悴の一人なと葎に生へる草一本



引抜くよりも些細な事と涙一滴溢ばさぬは武士の表世の中に子の可愛いうない者が凡ろ生ある者に有らうか餘り健氣な子に恥ぢて親が介錯して呉れる侍の綺羅を鏘つていかめしく横たへし此大小悴が首切る刀とは 西澤「五十年來知らなんだ老の悔みに清船も親の慈悲心有難涙 冬命二ツ有るならば君には死て忠義を立て父には生て養育の御恩を送り申さんに今生の殘念 西澤「是一つ 東澤「こなたの亭には後室か 定「サア〜日出度い〜そなたの名の雛鳥を其儘に装束の付け様も此女雛と同じ様に見合せてサア〜早う 東澤「サア〜早うと有りければ恨し氣に打守り 雛「女夫一對いつ迄も添ひ遂げるこそ雛の徳思ふお人に引離され何樂しみの宮仕雛の姿も恨めしい 東澤「取て打付椽板にころりと落し雛の首驚ろく母の胸板にひつしと極める娘の命包めさせさ来るはら〜涙 定「娘上げるといふたは偽り先づ此様に首切て渡すのじやわいのう 雛「エ、らんなら本統に貞女を立さして下さり升か 定「チイのう 雛「エ、忝い 東澤「有難いと伏拜む手を執て 定「死ぬるのを夫れ程に嬉しがる娘の心親じやもの知らいでならうか譬へそなたが機嫌能う受けやつても自害して死にやる覺悟とは知つて居乍ら若しそなたの死にやる事を聞たら思ひ合た久我之助俱に自害も仕やらうかとせめて一人は助けたさ母が手づから解た髪は下げ髪じやない成敗の搔き上げ髪介錯の支度じやわいの 東澤「高いも卑いも姫御前の夫と云ふはたつた一人穢ららしい玉の輿

何の母も嬉しからう 定「祝言ころせねど久我之助が宿の妻じやと思ふて死にやヤエ、是程に迄思ひ合ふた中せめて一日半日添はしもせず賽の河原へ遁るかいの「ト此間に抱帯を我腹帯にする事」 東澤「引寄せ〜雛鳥も膝に取付抱き付忝なさと嬉しさと逢ふて別る、名殘の涙一ツに落る三ッ瀬川 西澤「川を隔て、清船が最期の觀念悪びれず焼刃直なる魂の九寸五分取直し腹にくつと突立る 大「ヤレ待てせくな冥途の血脉讀さしの無量品親が讀誦する間一生の名殘女が面一目見てなせ死なぬ 冬「イ、ヤ存じも寄らぬ事此期に及んで左程狼狽な性根はムリ升せぬ去り乍ら今端の際の御願ひ私相果しと聞けば義理に繋かれ雛鳥も俱に生害致すべし左有る時は太宰の家も断絶暫らくの間切腹の儀はお隠しおされ降参承知致せし体の後室方へお知らせあらば女も得心仕り御臺となれば彼れが爲是ど色に迷ひぬ潔白大「チ、出かした能く氣が付た年來立ぬく武士の意地不和なる中程義理なるべし一命を捨つるは天下の爲家の爲花は三吉野侍の手本になれよ 西澤「肩よく言へど心の乱れ咲「ト右の櫻の枝を持」 大「あたら櫻の若者を 西澤「散らす惜さと不便さと小枝に注ぐ血の涙落て波間に流れ行「ト此淨瑠璃にて思ひす手に持し枝を落と」 東澤「それとも知らず悦ぶ雛鳥 雛「アレ〜花が流れて来るわいなアア、嬉しや久我様の御身に恙の無いぞるし私は冥途へ参じ升お前様は随分おまめで 東澤「千年も万年も御無事で長生遊ばして 雛「未來で添ふて下



さんせ 東淨「と心でいふが暇乞 無」思ひ置事言ひ置事モウ何もムんせぬ早う喉様切てく  
 東淨「切てく」と身を惜まぬ我子の覺悟に勵まされ胸を定めて取上れど刀の鞘に錆付く如く  
 離なれ兼ねたる血すぢの藕今切り殺す雛鳥を無事など知らず返事の櫻 東淨「同じく川に浮  
 ぶれば」ト右の櫻を川へ流す 久「水の面に流るゝ櫻は雛鳥が無事の知らせア、嬉しや悦  
 しや親人様采女様の御隠家は最前申上る通り最早此世に思ひ置事なし御苦勞なから御介錯  
 無」サア〜 喉様切ていな未練にムんす母様 東淨「泣ぬ顔するいぢらしさ刀持手も大磐石  
 西淨「思は同じ大判事子よりも親の四苦八苦 東淨「命も散りく〜 西淨「日も散りく〜 定」チ、  
 さうじやはや西に入る日輪は娘が迎ひ彌陀の來降西方淨土へ導き給へ南無阿彌陀佛〜  
 東淨「思切たる首諸共ワツと泣聲答へる 西淨「肝に徹して大判事刀がらりと落たる障子大」  
 ヤア雛鳥が首打たか 定「久我之助殿は切腹か 二人」ハア 兩人」チ、 西淨「死なしたりとど  
 うと座し 東淨「悔も泣も一時に呆れて詞も 西淨「無かりしが 東淨「ヤ、有て定高聲を掛け  
 定」入鹿大臣へ差上げる雛鳥が首御檢使イヤ御受取下さり升せう 西淨「呼はる聲を吹送る風  
 の案内に大判事欸きの姿改めて衣紋繕ひしづ〜とかり立 東淨「川邊の柳越し娘の首をか  
 き抱き 定「大判事様分けてこ何にも申升せぬ御子息のお命斗りはどうぞと存じ升たに其甲  
 斐も無い敢ない御切腹お前様のお心も身につまされて推量致して居り升る 大」チ、添ふに

添はれぬ悪縁を思ひ合たが互の因果 定「此方の娘も添ひたい〜」と思ひ死餘り不便に存じ  
 升せめて久我之助殿の息き有る内此首を其方へお渡し申升が娘を嫁入さす心でムり升 大」  
 實に尤嫁は大和筆は紀の國妹脊の山の中に落つる吉野の川の水盃櫻の林の大島臺日出度う  
 祝言させ升せうわい 定「スリヤ是迄のお心も解けて 大」ハテ互に今はわいやけ同士 定」エ  
 、忝ない〇と申升もはんの是があどの祭りはんに背丈のびたものを何時迄も子供のやうに  
 思ふて暮らすは親の習ひ甘やかした雛の道具も一人子を殺して何にせうぞ跡に置程涙の種  
 残らず川へ流れ灌頂さうじやく〜 東淨「未來へ送る嫁入道具長持犬張子小袖簞笥の篋  
 棹も命未らく居るならば一世一度の送り物五丁七丁續づく程美々しうせんと樂しみに思ふ  
 た事は引かへて水になつたる水葬禮大名の子の嫁入に乗物さへも中々に紀念も仇の爪琴に  
 首取り載せる弘誓の船あなたの方より 西淨「彼岸を流るゝ血汐清船が今端のかんばせ見る  
 親の口に祝言心の稱名 大」千秋万歳の 千箱の玉の緒も切れて 大「今は敢なき此死顔生  
 て居る内此やうに聲上嫁よといふならばいか斗り喜ばんに領分の遺恨より中直るにも直ら  
 れぬ義理になつたが二人が不運悴に立て、一人の娘能くぞお手にかけるられた過分に存する  
 定高殿 定」ア、勿体ない其禮はあちらこちら不束な娘故大事のお子を御切腹器量筋目も勝  
 ぐれた殿御夫に持た果報者とはいひ乍らあれ程まで手沙にかけて育てた子と又手にかけて



切る心 大「サ、推量致して居る武士の覺悟の常ながらまさかの時は取乱し介錯仕後れ面目  
 ない 定「イエ〜夫で目出度此祝言是が本の葬上嫁入り一代一度の祝言に舞殿の無紋の上  
 下 大「首斗りの嫁御察に對面せうとは知らなんだ 定「夫も子供が遁れぬ壽命 大「兎にも角  
 にも世の中の 定「子といふ文字に 兩人「死の聲の 東西「有も定る宿業と隔る心親々の積る  
 思ひの山々は 西「解けて流れて 東「吉野川いとい 西「漲る斗りなり涙拂ふて大判事  
 首かさ上て聲高く 大「悴清船承れ人は最期の一念にて輪廻の生を引とかや忠義に死する汝  
 が魂魄 西「御歎退治の勝軍を草葉の蔭より見物せよ 大「忠臣貞女の操を立て死したるも  
 のと高聲に 西「爛魔の廳を名乗て通れ南無成佛得脱唱ふる聲の聞へてや物得いはねと合  
 手と合せ兼たる此世の別れ早日も暮れて人顔も見へず慮の霧隠れ 東「埋む娘が亡骸は  
 こなたの山に止まれと首は脊山に檢使の役目我子の介錯涙の雫よしや世の中憂き事はいつ  
 か絶間の大和路や跡に妹山先立つ脊山 西「恩愛義理をせさ下す涙の川瀬三吉野の花を見  
 捨て 東「出て行「ト段切よろしく暮

四幕目口 杉 酒屋の場  
 一すだの野平 一酒屋 一杉 一娘 一三輪

- 一青のり藤六 一家主 茂義兵衛 一烏帽子折求女
- 一五洲兵衛 一丁稚 寐太郎
- 一鹿の土左衛門 一橘 姫

造物向ふ赤壁納戸口上の方折廻り障子家体七夕飾り立此前に井戸いつもの所に門口酒屋の  
 看板掛有り下手隣りの門口戸明立有り幕の内土左衛門五洲兵衛藤六野平皆々襦袢掛にて  
 丁稚寐太郎皆井戸替の見得眺らへの鳴物にて幕開らく 土左衛門「引いたり 寐太郎、五洲兵衛、野平  
 「チャットー「ト幕の外へ引て出て皆々這入る「 主「引いたり 四人「チャットー「ト此通り二遍  
 有てト皆々手を打是をきつかけにて幕明る婆々お杉出て「 婆々「近所の衆どなたも太儀で  
 んんした嘉例の通り井戸替が濟んだら酒盛よして暮迄緩くりと遊んでゐて下さんせコリヤ  
 阿房め最前から拵らへて置た酒肴が納戸に有るちやつと爰へ持てうせう 寐「おつとせう「  
 トとさん盃銚子鍋を持出で「 寐「先最初御覽に入れ升るが婆々の秘藏のとさん盃ト肴鉢硯  
 蓋向ふへ出し「 寐「硯蓋に組んだは蒲鉾玉子香茸のあしらひ肴鉢には根菜の薄葛客方は此寐  
 太郎が賞翫「ト取て喰ふ「 寐「コリヤかみさんらう張込ましやんまたのう 婆「又おのれが  
 撮み喰う 寐「イヤこりや毒味したのじや 婆「あゝいふ減らす口ぬかすまた鮮が有る取てう  
 せう 寐「チャイ〜「ト納戸口より喰ひ〜出る「 寐「此鮮はらう味い筈じや當所の名物釣



瓶鮮ア、井戸替へに釣瓶鮮とはコリヤかみさん秀句をやらんしたの 嬰エ、おのれに喰へ  
 とは云はぬは早う爰へ持てうせうコリヤゑらう鮮が減つたぞよ 熊其善じや箸一通り拙者  
 が喰た 嬰横道者奴が時に土左衛門様年嵩にお前から酒を初めて下さんせ 主チ、又雜作  
 なよしにさんせいでいらが相貸家で手傳ふも年中爰の水を使ふ恩返しじやわいのう五洲  
 兵衛さうじやないか 五チ、さうじやともく氣を張て貰ふては術奇い是からはいつもの  
 通り賑やかに遊び升せうサア野平藤六騒がうぞやく 野合点じやくそれはさうとコレ  
 かみ様見れば爰にも寺屋のやうに七夕様が祭つてあるのう 嬰さいなア見て下さんせ愛た  
 てないと思はんせうがこちらの娘のアノお三輪何やら星様に願ひが有とてあの様に内でも色  
 々の供へ物をさせた世界じやないかいな 藤ホウそりやマア奇特なこつちやさうして此娘は  
 留守のへ 嬰アいちいさい時往た寺屋へ七夕に呼ばれ升たサアく一ツ呑んで下さんせヤ  
 イ麻太郎扱み喰ひする手間で爰へ来て酌おとしおらうドリヤお吸物に豆腐でも煮升せうの  
 「ト内へ這入る」 熊扱々氣味のよい挨拶じや餘ッ程下手な呑様じや井戸の鮎が水飲む様に  
 口上げてがぶくどエ、それでは味が知れにくからう是此酒はかみさんが張込だこちらの銘  
 酒第一番男山と云ふ酒じやがこなさん達は本の無茶呑み此銚子の替り目からモウ鬼殺にし  
 て呉れうさうしてマアよい加減に酒香だらいつもの通り騒がうかいこちらのお三輪さんの三

味線と太鼓も借つて来て置た 大夫れはさうじやが此隣へ近頃來た相貸家の烏帽子折此井  
 戸替にも立合すあんまりなめた奴じやないかいの野平何と思やるぞ 野チ、夫れく生白  
 らけた顔付で馬鹿慇懃な生れ付平生ぬかす挨拶も委細らま切口上毛唐人の様な奴 藤大  
 方ッレ今流行早學問といふ本を見てからのほめ白をしおるのじや 主此井戸替へに出合ぬ  
 からと急度物言ひ付けてこます 野「さうせい」 「ト下手隣の内より求女着流し一本差に  
 て出て來り」 求女隣家に居り升る園原求女でムリ升か屋敷方の御用事に付未明より罷出只  
 今歸着仕る後室様には彌々御機嫌麗はしうムリ升せう後刻ゆるりと御意得るでムリ升せう  
 「ト求女這入りかけるを皆々叫さ合」 主ア、コレく待んせ 求ハア、待てとお止め被成  
 たは私めに御用でも 主貴様目があるなら庭を見い今日は爰の井戸替へじやぞや 藤ろれ  
 で相貸家が此様に寄て居るのよ 野こなさん計り來すと居て付合が濟かいの 藤但しはお  
 いらを潰すのかコレどうじやいの烏帽子屋殿 主是はくお顔を見れば皆合壁のお方此井  
 戸替へお手傳ひ勝手存せず段々の失禮眞平御赦免下さり升せう 主エ、コレく又委細ら  
 しい事云はんすかいのハテ勝手を知らにやせう事がない了簡せいからせいで済むこつちも  
 一番云ふた跡はモウいざごさはないわいの此土左衛門が呑込んだく 主然らばあなた様  
 がお執成で斯様又御教訓被成た上其いざごさどやら申と御遺恨はムリ升せんかな 五サア



モウよい云はんすな借みいらは餘程酔て居る是れからは嘉例の騒じや 藤、銚子が合はいで面白ない此盃でぎゆつとやらんせ 求、ハア、忝うムり升るが私一箇もたべ升せぬ 主、サアこれからが騒ぎの趣向此土左衛門に烏帽子屋敷五洲兵衛丁稚兼太郎べて四人の大踊三味線太鼓は野平藤六よいかく求女様も合点か 求、スワヤ私にも其踊を 五、チイノウこなた様は此長家でのあらめん猶踊らにやならぬ 主、音頭はおれが二役じやヤア千代の初めの一踊先は松阪こえたやつさ踊りハはりやくハッハヨイヤサ 皆々、ヤットサ〔ト是より寐太郎求女の手を持ち踊らす〕 寐、サットサ 皆々、ヤットサ〔ト是にて求女そろく逃げて這入る是を知らず皆々無性に踊り居ると茂義兵衛息せき出て〕 茂義兵衛、コリヤく如何に嘉例の祝でも餘り騒が嵩高なわい 皆々、ヤットサそれヤットサ〔ト家主何つても聞入れず踊る故をろく乗が来て踊り掛ける〕 茂、ヤットサ此家主を袖にして酒を呑めどもいハばこそ皆々、ヤットサ 茂、おのれら計り呑喰らひ近所を構はぬ大騒ぎ 皆々、チ、さて合点じや〇お家主へ渡したト皆々這入る茂義兵衛夢中に踊り居て茂義兵衛漸々心付こなし有て〕 茂、ア、やくたいたいもないやつらどうとれ迄夢中にした婆様内にうく〔ト大きな聲にて云ふ内を婆々出る〕 婆々、チ、是はお家主様ヤイ寐太郎めあなたがお出被成たらなせおれに知らせからぬ 寐、何言んとやらアノ御家主様も今の今迄同じ様に踊て有つたもの 婆、又づけく

と何云ひ居るサアく申何ぞ御用でムり升か 茂、チ、用どもく大事の用去る御侍から頼れたが入鹿様の言付でろれ鎌足といふわろの息子の淡海方々流浪して居るげお夫を見付出したら大金何でもこちへムれ篤くりと云て聞かさうサアちやつとく 婆、ハイくくさうしたらか前へ参り升せうヤイくく寐太郎よサアく忙しう成て来たモウ日が暮る火も消して見せ明い用心に氣を付い又此娘は寺屋から戻りの遅いソレ酒買が来たら叩き出せ盗人が来たら酒量つてやりからうぞサアお家主様参り升う〔ト茂義兵衛婆々這入る寐太郎跡に残り色々有る内向ふ橘姫襦袢振袖にて出て居直り隣りの内へ知らせをする隣りより求女出る寐太郎隠れ〕 寐、こなたの道より歩み寄る振袖の香やごとなき面を隠す絹かづき誰白絹の優姿窺ふ内に隣りの軒知らせのしわぶき主の求女 求女、今宵はどうして早くしサアくこちへく 寐、其跡は云はず語らず手を執て戸口よ立寄せ入跡に寐太郎は不審顔隣りの門口耳をわて聞かまして立戻り〔ト求女橘姫隣りへ這入る寐太郎出て隣りの門口に立聞の思入有てこちらへ来て〕 寐、何でも隣りの烏帽子めはおれとは違ふて餘ッ程ゑらい色事仕じやわいわいつがあの代呂物をしめかるをこちのお娘に聞せたら大抵の事じや有るまいエ、箸早い奴では有るわいの 寐、眩く所へ娘のお三輪の寺屋戻り足早に門口這入り お三輪、寐太郎今戻つたぞや 寐、ヤアお三輪さん戻らしやんしたかサアくく事じや



大事じやくくく 三、チ、あの人わいの何じやいのうわしに悔りさしやつたわいの 麻、さしやつたわいの所かいユレお前に忠義を云て聞すわいの 三、忠義とはろりや何の事じやいの 麻、エ、忠義どの忠義の事じやわいの 三、サア其忠義は知て居るがのろれがどうか仕たかや 麻、サア其忠義はアノ隣の烏帽子めの 三、求女様が何とぞ 麻、ム、求女其求女の姿のら起た事こちのかみ様は家主様へ用があつて往かしやると其跡へ何じや知らぬが眞白な絹をかついた幽霊かと思ふたが美しい術妻が隣りの門口をこくくくくと叩いたらさうしたら求女さんがつくと出てようごんした早かつたと云て手に手を取て内へ這入たそれからおれがじつとして聞て居たらおかしかつたわいなア 三、ム、何といやる求女さんの所へ美しい女中様が見ゆてその女中様と連立て這入らしやんしたといやるのか 麻、アイ 三、ろりや合点の行かぬ事 麻、腹が立うがなく 三、幸ひ噂様も留守なればそなた往て求女様を爰へ連れて戻つてたもらぬか 麻、チット合点呑込んだ 三、走り出て隣りの門口破れる計り打叩き 麻、コレ求女さん隣の酒屋から使に來た今のが濟んだら印判持て早うごんせく淨、口から出次第求女の悔り何やらんと立出れば物をも言はずマアくこちへと無理やり手に手を取連れて我家の内それと見るより娘のお三輪口にいねと赤らむ顔 三、求女様今お歸り被成升たか 求、チ、是はくくお三輪様寺屋へお出被成たげな 淨、互は味な墨付を麻太郎

郎が引取て 麻、サアおれが役はモウ是迄そこへ何々の達引さんせ爰らで我等粹を通し夜食の扶持に有付う〇兩人共にサア後に逢はう 淨、納戸へ走り入りけり、ト麻太郎こなし有て這入る 淨、跡に二人はつき穂なく未通女育ちの娘氣に思ひ詰たる一筋をいはうとすれど胸迫り 三、今麻太郎に聞たれば美しい女中様が宵からお前へ來てじやげな定めて夫れは隠し妻是迄お前と私が中途事さへも偶々に 淨、千年も萬年も變らぬ契りとかつしやつた其約束は偽りか 三、浮世の譯も辨へぬ在所育ちの私でも云ひ交はした事忘れはせぬ 淨、あんまり酷いと取付て誠先立恨み言「トお三輪色々をかし有て泣く求女こなし有て」 求、是は思ひ寄らぬ疑ひ成程女中は來て居るが春日の神子殿其連合の禰宜殿の烏帽子誂へに見ゆたのじや美女の愚か和歌三神を擔ひに掛け偽りは申さぬわいの 淨、時の間に合落付せば流石未通女の解易く 三、夫で私も落付た必ず變つて下さんすなへ 淨、立上つて七夕に供へ祭りし二ツの苧環持出て前に置き 三、私が寺屋へ往た時にお師匠様に聞て居た殿御の心の變らぬ様に星様を祈るに白糸赤糸の苧環に針を付結合せて祭るとやら 求、ム、それが則願ひの糸の乞巧針 三、ム、お前もよう知てじやなア〇白い糸は殿御と定め女子の方は赤い糸夫れで私も此願込めて寺屋で見た本の中に心を掛し女の歌ア、何とやらチ、それよ〇懸渡る思ひは千々に結ばれて幾夜願ひの糸の苧環 求、ホ、其男の返しには〇相見ての後の願ひの糸筋



を餘所へ乱すな君が苧環 三「アイ〜さうでムんした何時迄も變らぬしは赤い糸をお前に渡し白い糸を私が持ち 淨「契りも長き願ひ糸 三「夫婦の約束星合の 淨「鶺鴒かぬ苧環の千代の中立取かはし肌に附け合ふ割無き縁求女が内より以前の女歩み出てまなたの門口「ト橘姫出て来て隣りの口から」 姫「隣りの烏帽子折様はこなたへ来てムるかな免るさつしやれ 淨「めるさつしやれと内へ入る姿に求女は手持無沙汰お三輪は何の氣も付かず 三「ア、わちたが今のお方かへ 求「チイのうアレ〜神子殿じや夫れで薄衣着てムるなア申しお前様はアノお連合様の烏帽子を誂らへにお出被成たのじやなアさうでムり升せうがなサア〜さうでムり升せう 淨「包む詞の絹を洩る月の笑顔ヒンとすね 姫「コレ申求女様あの女中はおはしたかマア何人でムり升 求「アイヤ是は此酒屋の娘御 姫「ム、其隣りの娘御と最前から入しい間何の用がムり升た 淨「リ「問れて求女は答も無くうぢづく素振り見て取るお三輪 三「ア、申エレ神子様とやら云ふ女中様人をマアおはしたの何のと引つこなした物の云ひ様求女様にはアイ私が用が有るアイたんとムんすお前のお世話に成るまいし構ふて下さんすな 姫「チ、是はしたない其様に云やつてもそもじなどの用を聞く求女様じやないわいのサアお歸り被成升せ 淨「リ「と手を執ればお三輪は隔て、 三「イエ〜私がまだ用が有るいなす事は成り升せぬ 姫「イ、エ爰には置升せぬ邪魔せずと通しやいの 淨「リ「

手を引立て立出るイヤ放さじとお三輪も又あなたへ引けばこなたへ引く譯も落に戯れる鷹翼振袖振分け娑戀を争ふ其折柄息せき戻る此家の母「ト以前の娑々向ふ方走り出て来て直に内へ這入り」 娑「ヤア求女殿こなさんには用が有る何處へもやる事ならぬ動くまいぞ 淨「リ「身構へる何かは知らず白絹の姫は外へと出行を留る求女に又纏る娘を押わけ母親は求女やらじと引留め「ト此内麻太郎は納戸方出て是を一寸見て居て」 姫「イヤ減多にさうはさせぬのじや 求「エ、阿房めが何を知て 姫「イヤならぬ〜 淨「リ「あなたは互に戀慕ひ姿乱る、姫百合の手を振り切れば一時に乱れて走るを母親はやらじと追へば「ト此淨るりの内求女橘姫手を執り合て向ふへ入る麻太郎娑々を留めて」 姫「お三輪さん爰構はずとちつども早う行んせ〜 三「そんなら麻太郎頼んだぞや 姫「チット承知〜 淨「リ「跡かくれじと娘のお三輪同じ思ひを跡や先き道を暮ふて「ト此淨るりにてお三輪向ふへ這入る跡に娑々寢太郎こなし有て」 娑「エ、おのれはなア大事の求女を逃しくさつてドレ跡を追ふて「ト行かけるを」 姫「イヤさうはさ〜ぬのじや 娑「エ、何をぬかすぞいそこ退けやい 姫「イヤ退かぬ〜 娑「退けやい 姫「イヤ退かぬのじや〜 娑「待て〜」ト是にておらしみの立廻り有つて宜敷幕



## 役名

一鳥帽子折 求馬 一橘 姫 一娘 か 三輪

質は中臣淡海

本舞臺一面淺黄幕にて幕明く「ト直ぐに頭取上下形りにて出て巻觸を讀上げ這入る是にて上手出語り臺の上りになる」淨「岩戸隠れし神様は誰とね、して常闇の夜々毎に通ひては又歸るさの道もせ氣もせ夫も何故戀故にやつる、しよてい耻のし、」ト淺黄幕を切て落す

本舞臺半舞臺真中赤鳥居上下玉垣此前櫻の立木空より同じく釣枝向ふ本社 of 遠見此模様宜しく道具納る 淨「面影隠す薄衣に包めど薰り橋姫思はぬ人を思ひ佗び心の丈を口説けどもつれなき松の下紅葉こがれて絶ん魂の緒も殿故ならば捨草も暫しは憩ふしば村の賤の男が」ト此内橘姫前幕の拵らへ矢張りかづきを着て出て來り花道にて留る下手離子臺にて「明置手拭で忍びく」の出逢ひ妻晩にムらばナコレのんやはんにさ瀬戸の柿の木枝越へて連理を契る言の葉は「ト橋姫ふり事あつて」淨「夫も戀中爰に又は、中村よ一森の長者か跡と名に響くかまが口をも出離れて歩むに暗き吳竹の茂れる中を分行けば」ト舞臺へ來る「明葉毎の露がほろ／＼とほろ／＼打なる雉子の聲思ひくらべていと猶心はその立尽を憎

や案山子におどさる、我が姿に又おぢてバツと立行く羽風につれてちり／＼散るや柳本流る、水に裾濡れて物思へとやおびとけの里浦山し自は終に一度の情さへ泣て身を知る涙雨「ト宜しく振事あつて納る」淨「ふるの社の御堂の蔭か松の木の間になら／＼と見へつ隠れつ歸るさの跡を求女が慕ひ來て」ト向ふより求女前幕の拵らへよて苧環を持ち出て來り舞臺へ來り」淨「互にハタと行合の星の光に顔と顔」ト兩人顔を見合せ」求女「ヤそなれば 橘姫「求女様か 淨「ヤア戀人か何故に爰迄跡をふひ鳥は 橘「若しや時 of 契をも 淨「叶へてやるとのお心かと胸にのいへど詞には面はゆぶりの袖ざちやう 求「成程切なる志し仇には思はと去りながら 淨「左程こがる、戀路にて晝をば何と鳥羽玉の夜斗りなる通ひ路はいと不審なり 求「名所を 淨「聞たる上はこなたより二世の堅めは願ふ事明させ給へと只管に問はれて實にもはづかしの森で餘れる憂身の上語るにつらき葛城の峯の白雲ありぞ共定かならざる賤の女と 橘「思ふて深い疑ひの 淨「雲を晴らして自が思ひも晴して給へらばそんな仰せも背くまい 橘「假令草葉の露霜と 淨「消へても何の厭やせぬ是程思ふに胸慾な解けぬお前のお心はあんまり結ぶの神様を祈り過した咎めかやつれなの君やと恨み詫び」ト振事ある」淨「思ひ乱る、薄影夫と三輪は走り寄中を隔て、立柳立退く袂引留め」ト此内向ふより三輪前幕の拵らへにて苧環を持ち出て舞臺を見てツカ／＼と來り兩人の間へ這入る兩人恟り



して飛退くを三輪求女の袖を捕らへ」ふ三輪エ、聞へ升せぬ求女様ソリヤ氣の多い悪性  
 な 唄抑や二人が馴染は初て三輪の過し夜に棄越しの月の面影はお公卿様やら侍様やら知  
 れぬ形振りすつきりと水際の立よい男外の女は禁制と玄めて堅めし肌と肌 淨主ある人を  
 ば大膽な断りなしに惚るといふんな本にもありやせまい女庭訓賢方能う見やしやんせ 三  
 エ、たしなみさされ女中様 三イヤそもじとてたらちねの 淨許せし中でもないからには戀  
 は仕勝よ我殿御 三イヤ私が 三イヤわしが 淨と共に縋りつ手を執て 唄園に色よく咲  
 草時は男女になぞらへいはいはれう物か夕顔の梅は武士櫻は公家上山吹は傾城杜若の女  
 房よ色は似りや菖蒲は妾牡丹は奥方よ桐は御守殿姫百合は娘盛りと撫子のサアなるぞへ  
 くになるとならずと奈良坂や此手柏の二人の女 淨睨めは 唄睨む萩と萩 淨中にもまろ  
 い男郎花 唄放ちはやらじと縋り附こなたが引けば 淨あなたが留め 唄戀の柵葛蔓附纏  
 はれてくるくくく 淨廻るや三つの小車の花より白む横雲の柵引き渡り有々と三笠の山  
 も程近く鳴鐘の音に驚く姫 唄歸る所は何所ぞと求女が機轉振袖の端に縫ふてふ取かはす  
淨縁の苧環いとしさの餘りて三輪も悋氣の針男の裾に附る共知らず印の糸筋を慕ひ慕ふ  
 て「ト三人宜しく振事あつて求女は真中に立ち橘姫は上手お三輪は下手にすはり見得宜し  
 く三重にて幕

大 詰 新 御 殿 の 場

役 名

一漁 師 鱗 七	一宮 越 玄 蕃	一橘	一姫
實は金輪五郎今國	一官 女 杉 の 局	一娘	お 三 輪
一官 女 夕 顔	一同 竹 の 局	一仕 丁	又 次
一同 忍	一同 松 の 局	一仕 丁	逸 作
一同 楓	一同 梅 の 局	一仕 丁	次 郎 又
一同 女 郎 花	一同 紅葉の局	一仕 丁	大 勢
一荒 牧 彌 藤 次	一同 櫻の局	一捕 手	大 勢
一烏 帽子 折 求 女	一豆 腐 の 御 用		
實の 中 臣 淡 海	一入 鹿 大 臣		

造物一面の高二重高欄附竹の節欄間一面の御簾上げ下ろし有り向ふ金の大襖真中に大瓦燈  
 口錦の純帳かけ有真中に擬寶珠付の階二重真中に二疊臺右二重上手より少し跡へ寄せて緞子  
 張の折廻り障子家体但し後に消事有り取置にして有へし右平舞臺上手寄に秋草のうね仕か  
 けて花枯れる事有り都て結構なる御殿の見得幕の内仕丁三人竹箒切水桶を持ち掃除し



て居る体此見得宜敷天王建にて幕開らく 淨瑠璃「榮ゆる花も時し有ればすがり嵐の有ぞど  
はいざ白雲に聳へたる新に造る玉殿ハ彼唐國の阿房殿爰に移して三笠山月も入鹿が威光に  
覆れたる斗りなり門の方宮越玄拵荒牧彌藤次御前よきまゝ高う吹帆影烏帽子も十分に仰  
反り返り入来る〔ト序の舞になり橋懸方玄拵彌藤次衣裳龍頭巻半素袍にて出來りて上下は  
へ別れ相引に掛かり〕玄拵「イヤ何彌藤次殿此度新に築れたる此山御殿朝日に輝やく所は吉  
野龍田の花紅葉を一度に見る共中々及ぶまじき絶景ではムらぬか 彌藤次「イヤ玄拵殿の御  
意の通り見ぬ唐土の阿房宮咸陽宮はイヤ知らず恐らく我日の本に又とムるまい我々づれの  
舌頭に延るも恐れ多く存するでムるての 玄拵「左様々々馬腦の梁珊瑚の柱水晶の御簾瑠璃の  
障子 彌「飛石は琥珀砂は金銀 玄拵「又釣殿に登り見れば春日の杉も前栽の草びら若草山葛籠  
山はまさ石同前 彌「猿澤の池はか庭の井戸と相見へ升てや 玄拵「いりさま左様でムる〔ト音  
樂になる〕彌「何玄拵殿アノ音楽をお聞成され我君御殿へお入と相見へ物音近く聞へ升るて  
玄拵「何様左様でムらう然らばお出迎仕らう 彌「左様仕らう 淨「いかさま左様と威儀繕ひ嚴重  
にこそ扣へる花にくらし月に明し酒池の遊びに酔疲れ御殿々々の通ひ路も數多の官女が  
道樂に〔ト是にて管弦に成〕彌「御入り〔ト向ふ方入鹿大臣鬼衣跡方仕丁朱の傘を差かけ  
官女大勢島臺桃子盃など色々持出て來りて花道能き所に並び〕入鹿「蒼々たる廣原落々たる

草邊も磨が威勢に依て暫時の内に金殿となり甲乙比律の調べも賑敷今日の粧はひ官女が艶  
色諸人の尊敬ハノ面白の有様よア 玄拵「ハツ我君様にはお早きお入 入「ホ、ウ玄拵彌藤次  
未明よりの出迎ひ過分 彌「ハツ我君様にはイヤ先是へ 兩人「お入有られ升せう 淨「己が不  
徳に押し登る雲間の深緑對錦の褥の上にひんづと座せし有様は實に類ひなき榮花の殿玄拵  
彌藤次頭を下げ 彌「ハツ言上仕り升る〔ト樂にふる〕彌「先達て卿上雲客達より君の壽を祝  
奉りし數の島臺御上覽下さり升せう 玄拵「それ女中方 兩人「持參召れ 官女皆々「ハア、淨「アツト  
答へて持出る思ひくの銚物 女拵花「何がな君を壽て祝ふ鶴龜松竹の 彌「影は千尋の深緑松  
と鶴龜合せて見れば 淨「一萬二千の齡ひを保ち君に譲りて壽ぐ蓬萊 夕顔「此島臺は周の帝  
の思ひ者仮の情の弟艸 女拵花「實に寵愛の色菊や葉毎を染し其筆の 彌「命毛長さ八百歳の  
老せぬ藥菊の酒 淨「汲共尽ぬ泉の壺殿上人の方々よりの御献上で 皆々「ムり升る 入「ホ、  
ウ諸卿を始め万民より磨が壽命長かれと願ふ事銘々の身の冥加猶萬歳を唱へよや 玄拵「イヤ  
仰迄も候はず千秋万歳 彌「只々お目出度 兩人「存じ奉り升る 入「チ、満足々々 淨「高慢我  
慢の御仰せハツト兩人階下にひれ伏 玄拵「ハツ我君の御聖徳我々は申すに及ばず民百姓に至  
る迄山野に手を拍て舞ひ樂ひは今此時 彌「實は鎖さぬ御代とは斯る折柄皆万歳を唱ふり升  
二人「只々御目出度う存じ升る 淨「滅多に追従狸々の人形よ見とれ官女達 女拵花「何と楓様



見やまやんせ此狸々が手に持た酌も盃も取置て 楓、それ／＼盃には誠のみきを湛へたと何とよい趣向じやないかいなア 忍、本にマアこりや何よりの御献上物 夕顔、何と此みきで御酒宴を始めやうではないかいなア 入、何さま一献酌まん 玄、彌、サ、お酌を早く／＼ 早う／＼と取々に手まづ遮ざる盃の廻れや／＼萬代も尽せぬ寛樂の興を催す其所へト向ふ戸家の内にて 駿七、物もう頼升せう〇 淨、とどつてう聲撥髪天窓の大男御殿間近くはつう／＼／＼着たる木綿の長上下糊しやき張て立はたかり 鱒、エ、入鹿ぞんは爰じやな内にか内になら逢して下さんせ 玄、ヤア何奴なれば我君の御前共憚からず尾籠千萬早く御前を彌、玄、下りからう 鱒、イヤかりや鱒七といふて浪花の浦の綱引でござんすがア、いつやらの事で有たがこちらの方へ宿替へしてござんしたお公家ぞん鎌さりの大身から雇れて來た使でござんす 淨、いふを遙かに見下ろす入鹿 入、ハテ心得ぬ其鎌足めは首陽山の昔を學び跡を隠せしとの噂扱は浪花の浦に隠れ住よな天下は我治ひる所なれば今日迄飢にも勞れず健固にかりしは是皆膺が恵みならずや 玄、いかにも其恩を思はゞ疾にも參殿なして恩を謝すべき所 彌、斯る田夫野人の下郎を使に立しは 両、人、緩急至極 鱒、エ、コレ夫をねれが知た事かいの田夫野人の座禪豆じやのといふて楠瀬起さんすが〇ア、コウ見た所がよつばと短氣なわろじやわいのしたがり兎角喧嘩はこなんの様にこつさでゆくのがマア徳じやてやハテ鎌

ぞんも一旦は言ひ掛りでこなんとてつばつて見様と思はれたさうなが叶ぬやらしてどうぞおれに往て挨拶して呉れいて、夫と／＼きつい弱りのモウ大概の事なら了簡してやらんせ善い中の小さいさかいと云て懇な中はゑて心易立て間違ひの有る物コレ中直りの印じやていさす一升おこされた 淨、刀のさげ緒にふら／＼と結びし徳利急度目を付 入、ハテ訝ぶかしや未だ日本へ渡らぬ兵器唐土に有りぞ聞 彌、飛道具の類ひなるよな何にもせよ怪まら物をも所持せしど方々油斷致すな 淨、眉を擦めて扣へたり 鱒、ハテ仰山な何もやばなもんじやござんせぬとつけもないコレ篤くりと見やんせ酒じや／＼然も此酒はエ、ソレ何とやらいふ良い酒じやぞやこなんを大事と思はんすりやころしかあの中からさつさりと一升はづせしやつたのじや程にコレそこな万歳の様なか手代衆早う旦那ぞんに進せて下あれや 玄、ヤア善悪邪正の知れざる鎌足が差上し其酒モシ毒薬なんぞの仕込有らんも知れ難し 彌、鹿忽に我君に差上る事 両、人、罷りならん 鱒、エ、過すは／＼夫程此きすが心元なきやコレおれが毒味してやらうコレ萬歳殿石こぎはないか 両、人、何石こぎとは 鱒、エ、睨らむは／＼茶碗はないかといふ事いの〇よいは茶碗がなければじさやりじや赦るさんせや 淨、いひつゝ徳利の口から口 鱒、ア、コレ良い酒じやにあアこんな酒を呑まぬといふ事が 淨、有るか知らんと振て見て 両、ヤア／＼南無三 両、人、扱ころな 鱒、イヤ皆呑で仕舞たエ、コレひよんな



事して退けたコレひよつと鎌どんに逢しやんせうと儘よおれが呑たといはすに届たと禮い  
 ふて下んせや 淨我武者なやうでも正直者まじめになつて氣の毒顔 殿ア、まだ何やらこ  
 とづかつて來たが落しはせぬの 淨と懐ろ搜し 殿チツト有のくサアく是じやく是  
 見やんせ 淨渡せば彌藤次押開き 彌何々我身不肖たるに因て暫らく心を減はすと雖も入  
 鹿公に背くは天に背くも同じと先非を悔て爰に降參を乞者也今々臣下に屬するの印君の齡  
 を東方朔に譬此桃花酒をもつて御壽を祝し奉る内大臣藤原の鎌足謹で申す○我君様イヤ御  
 上覽有られ升せう「ト差出す」 入ハ、なまくら者の鎌足の臣下とならんなるとはしら  
 くしい偽りやつ 殿何じや鎌殿を喰つさとは何ぞ儲な證據でもごんそか 入ヤア小ざ  
 かしい證據呼はり彼が心腹いふて聞けん 殿チ、ドレ聞やんせうか「トどつかと下に居る」  
 入チ、聞度ばいつて聞けん先此入鹿を東方朔に譬へたがコレ即ち野心の證據 ぶが「ろりや  
 又なじよに 入チ、昔漢の武帝が代に東方朔といへるやつ三千年に一度實を作る桃を三度  
 盗て喰らひし故九千年の齡を保つ桃に百の縁をかたどり百敷百官を手に入し入鹿を盗人な  
 りといはぬ斗りの底工みイヤ憎くい奴の 淨居丈高 ぶが「イヤくそりや無理じやく無  
 理でぞんす 入ヤアうぬうづ虫め何を知て 殿イヤねりや何も知らんければ鎌殿の代りに  
 ちつて來たかれじやに因て一番いふのじや 入チ、鎌足が代りならば是もかわりに試みよ

淨傍ある鳥壘追取て眉間へはつしと打付ける毒は微塵と飛散れどびく共動かず 殿ア、よ  
 いかげんにだゞけさつしやれ其厄拂ひの代品物東方朔とやらに喩たといふて夫で業わかす  
 のか年にあやからんせとこそ書てあれ盗人とは書ちやないぞや夫にろつちから色々な講釋  
 を付て盗人詮索知つた同士はすしいとやらで盗人の覺悟が有かして今の投打ア、こなん  
 は正直な人さんじやと世間の噂見ると聞とで大きな違ひマアそんな盗人と鎌殿を懇にはお  
 れがさすまいわいの仁体にも似合はぬ事さんすのえたが餘もやさうじや有まいがの但しは  
 覺がごんそのイヤさうかいの 淨文盲だらけも理屈は理屈 殿どうでぞんす 淨どやり込  
 れば邪智の入鹿も苦笑らひ 入ハテ口賢しこくも言ひ曲げしよな下郎に似合ぬ丈夫の魂う  
 いやつ出かしかつた其褒美には鎌足が實否を糺す迄かのは人質最早籠中の鳥同前歸る事  
 罷りならん○ヤアく玄蕃彌藤次萩殿にて盃の廻らさん方々參れ 玄彌ハア、女官先づ  
 入らせられ升せう 淨引連れて帳内深く入にけり「ト又管絃になり皆々奥へ這入玄蕃彌藤  
 次は上手へ這入る 殿ア、コレくかれを人質とは悪い思ひ付じやぞや着物や道具と違ふ  
 て此代品物は飯を喰ふぞや併しアノ業腹では大体では喰しおるまいエ、すき腹に今の酒で  
 よつば酔が廻つて來たわいどりやどこでなど一と寐入やつてこまそか○エ、腰がぶら付  
 て重いと思や其筈じや此大小○エらつちもない物差さしておこして「ト大小を抜き二重へ



上りて 殿「エ、あた面倒な」ト二重へはをる」淨「あた面倒なと椽板へぐわたりと鳴るこ相  
 圖かど突出す鎗は篠薄」ト二重の下より鎗を突出す鱗七宜敷へし折」殿「テモきつい用心の  
 う 淨「搦はすころり臂枕不敵なりける男なり御所より外へ喚出ぬ若き子達が入替り男見に  
 來る愛想にはお茶よお菓子よ田葉粉盆銚子土器持出て 櫻の局「コレそな人は何御用有てお  
 召寄せのはしらね共無待久しう氣も尽さやう 紅葉屋「御簾の際より垣間見た珍らしい元服  
 男 梅の局「形りに似合ぬ上下大小 松の局「君の御流れ頂戴しや 竹の局「お爛のさめぬ其内に  
 杉の局「わしらも合をせう程に 櫻「マア氣晴らしに地下の人 淨「と差置ば牀寐返り腹這に頬  
 杖つくく」打詠め 殿「貴様達は誰じや 櫻「我々は上様の身近く召さるゝ 皆々「女子共 殿「  
 何じや短い女子共じやぞれ」立て見い」 皆々「こうかや 殿「そちら向て見い 皆々「こ  
 うかや 殿「いか様ぞれも是もようにへ込だ者じやなシテわいらは愛な飯糰じやなテモ希有  
 な前垂してゐるな 紅「エ、つがもないざれ事 梅「さうしてわしらを問やるそなたの名と 皆々  
 「何といやるぞいのう 殿「ハテ商賣の夜網に山りや沖でも磯でも行當りによろ寐るよつて  
 鱗七といふ漁師」 皆々「何漁師とはや 殿「よ、漁師」 松「何料紙」 といやるからは何  
 ど書てたもるのや 竹「チ、何ぞ書てたもるなら繪や歌はいやじやぞや 杉「チ、それ」今  
 浪花津でもてはやす歌舞伎役者の紋ならば 淨「書てはしいと」しどもなき櫻の局すり寄て 櫻「

さうして下々では皆そなたのやうな男かや 紅「大方善い男もたんと有であらうのう 梅「本  
 にマア地下の女子は羨ましい芝居は見次第善い男は持次第 松「本に又此御所女子には何が  
 なる 淨「見るも」冠装束窮屈で急な逢瀬の其場でも衣紋の紐よ上帶よ解かはぞくか大抵  
 では 竹「下紐迄は手がと」かず 杉「つい其内には花に風 淨「月にむら雲障りが出来て 皆々  
 「はいない別れをするわいのう 淨「言ふさへ顔に紅葉の局 紅「中將や少將あたりで戀すれ  
 はアノおひのけが邪」になり 皆々「尻目づかひは出来ぬ」其上倍氣いさかいもこつちか  
 らは槍扇で 淨「叩けはあつちは笏で止め 皆々「つづばりかへつていきつた斗りしんき」  
 で暮らさうより 淨「いつろの事に魂の緒も絶なば絶たがましであらう 櫻「若しもや誘ふ水  
 しも有らばわしやいにたいわいなア 皆々「是さうじやぞいのう 殿「エ、忌々しい術妻めら  
 きり」うせあがれ番付の匂ひがするわい 紅「何番付の匂ひとはや 殿「エ、臭い者身知ら  
 ず寄りやがるな 梅「何の事ない」とんど乱心者見る様なわいのう 皆々「ム、それ」氣違ひよ  
 く 殿「エ、八釜しいとつと」うせあがれ 櫻「玉の盃底抜け男 皆々「アノ愛な不骨者め 淨「  
 不骨者よと不興してはいなく奥へ入にける」ト官女皆々奥へ這入る」 淨「あたり見廻し長柄  
 の銚子庭の千艸にさら」と注ぎかくれば忽ちに葉立變じて枯凋む 殿「最後の鎗といひ又  
 候や此毒酒テモきつい用心な 淨「猶打見やる庭先へ弓と矢つがいばら」ト平舞臺



上手が大ぶん矢をゆる弓矢にて鱈七を取巻く」芝御上意〇おのれ最前鎌足方の使と名乗り不骨者と見せかけ我々を嘲弄ひろく類魂如何にしても心得ず彌我君の御不審を尋なさるゝ子細も有れば引立來れと君の上意さりと御前へ参りおらう駿チ、呼にごんせいでも行のじや仮初にもびこくと一寸でもさわるが最期腰骨を踏み折つて疝氣の虫と生別れじやぞよ兩人「さりとくうせう駿わいら其鳥おどしを放すが最期とつつかまへて首引抜き片端からぬたにして呉れるぞよ家來皆々、ヨウ、願ドリヤおれから先へ行きやんせう淨事とも思はぬ大膽者胸の強弓矢襖を引明け「ト送りにてのさ」と上手へ這入る皆々も這入る」淨てこそ入にけるされば戀する身ぞつらや出るも入るも忍ぶ艸露踏み分けて橋姫すこく歸る對の屋の障子にばらり打つ礫ろりやお歸りのしらせぞと銘々庭に集い下り官女女郎花「只今お歸り遊し升たか想おいとしやお庭の内さへ遂におひるひをされぬに忍戀おればころかち跣足夕顏無朝露でお裾も濡よう尾花「サア」く小打着とた召かへ皆々遊し升せう待宵是々楓此お振袖に何じや付て有わいのう昔菊本に此紅の糸はどうした事じやぞいのう更科ハテ面妖なマアろなた手繰つて見やいのう皆々ろれくさうせうわいなア淨手繰くればくるくと糸による身はさゝがにの雲井の庭へ引かれ來る「ト向ふより求女前幕の形にて芋環の糸を手繰りながら出て來る橘姫見て」淨主は床しの橘

ヤア求女様の求そなたの館は是でゐるの橘サア夫れはなア求フト馴染めし夕より夜毎くの通ひ路に終り一度も晝とては通ひ路無さが不思議さに橘スリヤ自が歸る所を知らん爲求芋環に針を付け慕ひ來りし甲斐有て橘心のせく盛氣も付かず求此糸故に橘此身の素性をハア淨はつと驚く姫よりも騒ぎさやめく局達女郎花扱も見事お姫様の装の糸で楓引寄せた七年もの戀人様忍ようこそお入り遊ばし升たなア皆々サアくこちらへお出なされ升せ求アイヤく全く手前は左様な者ではムらぬ手前はツイ道通りの者でゐるが此芋環を拾ひ上るやいな思はず引れてツイ此所へ参てゐるモウお暇申升る淨出る向ふを立塞がり夕顏エ、氣の悪い何の私等にお隠しなさるゝ事はムり升せぬ尾花「モシ私等にか包みなさるゝ御遠慮ならノウ皆様皆々それくドリヤ粹を通さうか淨ドリヤお次へと立て行く姫は兎角の詞なくさし俯向て思案の求女求此館の姫と有るからは入鹿の妹橘姫殿橘入鹿が妹と御存有るあまたこそ藤原の淡海様求ア、コレ「トあたりへこなし是にて管弦になる」求女なれ共敵方に我名を知られては此身の一大事不便なれ共生けては置れぬ橘成程此身の上を御存の上からは餘りや添ふては下さるまじ生てゐる程思の種お手に掛かるがせめてもの本望〇とはいふものゝ斯う云ふ内もお姿やお顔を見れば輪廻が残る未練お心の出ぬ内に早うお手に掛て下さり升せ求チ、よい覺悟「ト後ろへ



廻り刀に手を掛る」橋、南無阿彌陀佛「ト手を合す求女色々ためし見て」求、殺すに及ばぬ  
 心底見ぬた 橋、エ、 求、左程夫婦に成度は一ツの功を立られよ 橋、何一ツの功を立よとは  
 求、チ、そちが兄入鹿が盗み取りし寶劍を奪ひ返して渡されよ 橋、エ、アノ自に其御劍を  
 求、チ、奪ひ返して渡されなば夫が即ち夫婦の印望の通り二世の契約 橋、いかに此身の願  
 が叶へたい迪 求、不得心なれば夫婦の縁も是限り 橋、サアそれは 求、離縁せう共夫婦にな  
 らう共となたの心底次第にて 橋、と云ふて現在の 求、然らば夫婦の縁切らうか 橋、サアそ  
 れこ 求、得心か 橋、サア 両人、サアくく何と 橋、成程お詞に随ひいかにも夫の爲命に  
 かけて仕かふせてお目に懸け升せう 求、チ、でかしやつたそれでこそ四海の治り 橋、首尾  
 能く仕かふせれた其上では 求、二世かけて變らぬ夫婦 橋、其お詞を聞う爲 求、モン仕かふせ  
 し時の相圖は 橋、今宵御遊の舞に事寄せ笛太鼓の音を知るべに奥の庭迄お忍びあれ 求、然  
 らば舞樂の調べを相圖に 橋、奥の御殿迄 求、とは云ふもの、かよわき女の手業で 橋、若し  
 見咎められた其時は是が此世の、お顔の見納めたとへ死でも夫婦じやと仰有て下さり升せ  
 求、運命拙なく若し事願はれ其場で空敷なる迪も塵未來さい替らぬ夫婦 橋、エ、お嬉しうム  
 り升 淨、抱きしめたる鴛鴦のつがひし詞縁の綱引別れてぞ「トナク」にて兩人咄合東西へ  
 別れ這入る」淨、忍むる、迷ひはぐれし片鶉草の靡くを知るべにていさせさか三輪は走り

入「ト向ふよりお三輪前幕の形にて出て」お三輪、エ、ツ、とモウ此芋環の糸めが切れくさ  
 つたばつかりで大事の殿御を道からとんと見失ふた去ながら爰より外に家はなし大方内方  
 へ這入らしやんしたに違は有まい○モンちつと物が尋度うムり升るが○チモマア奇麗な内  
 方じやがあた用心の悪い明廣げて置いてからに大方芝居でも見に行なさつたのかへエ、ユレ  
 どうぞ誰ぞ來ひでいなア物が尋たい事じやがなア 淨、見やる先かおはしたががづき目深に  
 しやなくと豆腐箱提げ歩み來る「ト豆腐の御用臆病口より出て來る直に向ふへ行かうと  
 するを」三、アイヤくく「ト物がお尋致たうムり升 淨、チット吞込早合点 豆腐御用、何じや  
 物が尋たいハ、ンお臺所を尋やるのかお臺所はそこをこちらへかう廻てそつちの方をあら  
 へ取りあちらの方をそちらへ取右の方へ這入て左の方を直にわき目もふらずにすつと行  
 きやくく 三、イエくく「私が尋升のはお臺殿とやらではムんせぬ年の頃は廿三四色白にして  
 くつきりとしたよい殿御は忝升せなんだかへ 豆、チ、來たげなく、然もそれはお姫様の戀  
 男で三輪の里から跡追ふて來た所を何がお局達引捕らへて有無をいはず御寢所へくつ  
 と押込み 淨、宵の中内証の御祝言が有筈とくれぬ内から騒いでじや 豆、チ、けなり「ト詠  
 らへの歌有て色々有り有」豆、豆腐の御用が急ぐわいの 淨、しやべり廻て出て行三、サアく  
 くひよんな事が出來て來た本にく油断も透もなるこつちやないわいなア大それた人の



殿御を盗みくさつてからに何じやいしこらしい内祝言じやのと餘りな踏付けやうよい／＼其替りに何處に居やしやんせうと儘よ尋出して求女様の手を引て是見よがしにいで退るがせめてもの腹いせヲ、さうじや／＼ 淨行かんとせしが 三「イヤ／＼／＼はしたのうをんな事してひよつと又愛想が盡まい者でもない〇といふて此儘に見捨てさうマアいなれうぞ〇こりや矢張り奥へ行て求女様を〇エ、コレ廣い内じやによつてさう行たら善いやら頼と勝手が知れいで〇イヤ／＼／＼コリヤ滅多に行れぬわいなア〇エ、コレマアいぬにもいなれナエ、マアさうせうぞいなア 淨心も空登る階長廊下「ト色々こなし有てそろ／＼と階へ上りそつと御簾を覗くと内にて」 官女大勢「誰じや／＼」 三「ハイ／＼」ト胸りしてつか／＼と平舞臺へ下る」 官女皆々「何者じや」ト是にて御簾捲上る官女並び居る管絃に成る」 櫻「見れば見馴れぬ女子じやがそなたは誰じや 皆々「何者じや 三「ハイ／＼」アノ私は 皆々「アノ私どの 三「アノ内方の 皆々「アノ内方の 三「チ、それ／＼」お臺殿に 皆々「何お臺殿とは 三「ハイ／＼」其お臺殿とは寺朋輩でムリ升たがアノ内方へ出られ升てから久敷逢ひ升せんによつて餘り懐かしさに一寸見舞に寄升たら是はマア能來た上れ茶々呑め煙草喫めて、さうして何やかや咄致升たらお上には御祝言が有どの事本にマア内方の様なよい衆の御祝言はどのやうな者じやかのれやれ拜んでなりと腹いやうと思ふてツイうか／＼と爰迄参り升たの

でムリ升さうぞお前様方のお心で其聲様を一寸なりと拜まして下さつたら大体や大方お嬉しい事じやムリ升せぬでムリ升まいなア 淨恨む色なる紫の由縁の女と早悟りなぶつてやらうと目引袖引 櫻「何と皆聞やつたかアノやうに泪を溢ぼして頼むは 紅「アノ聲君様が拜みたいといのう 梅「道理で内方じやの何のといひかねた筈じやわいのう 松「何とあの様に頼むからはいつそ聲様を拜ましてやり升せうじやムリ升せんか 竹「テモマアそちは仕合せ者じやぞやかういふ折に來合して 杉「お座敷を拜むとは姫御前の身では手柄者じやぞや櫻「それ／＼したがこちらが吞込でお座敷へ出してはやる者の 紅「何を役をせねば出されぬぞや 梅「ア、コレ何ぞ相應な役をさしてやりたいものじやが 杉「チ、よい事が有わいのいづそ此女子に酌をとらさうでは有まいかいなア 皆々「本にコリヤよからうわいなア 三「ア、申し／＼其酌とやらは私は遂に見た事もムリ升せんわいなア 櫻「知れた事いなの何の又そち達の様な下主女が知てたまるものかいのう 紅「よい／＼そりやわしが教へてやり升せう 梅「そんならあなた教ておやりなさり升か夫は御苦勞でムリ升わいのうサア／＼篤くりどわがみ教へて貰やいのう 三「イエ／＼私しや産付て不器用者じやによつて其様な六ヶ敷い事は急に能う覺ゆ升せぬ程にさうぞそんな事なしにツイ連れて行て下さんせいなア 松「何といやるそんならアノ酌をする事は否じやといやるのか 竹「そつちが否やから聲様を拜



ます事はこつちもマアいやじやわいのう 三「ア、申々そんならどうぞ其酌人とやらに 櫻、さう有りさうなものじや教ねるにしても何ぞ道具が○チ、幸い／＼爰に銚子島臺をもつて教てやり升せうまいのう 紅、所でマア有合せの髯君には松の局殿扱嫁君には梅の局殿サア／＼／＼持ちや／＼／＼そんなら私の侍女耶 竹「サア／＼是で揃ふた／＼サア／＼皆並らばしやんせ／＼所でそなたは 洋、いやがるか三輪に長柄の銚子持せ持添 杉「マア盃は三ツ重じやよいかや所で嫁君へ二度つぐはよいかやさうして左りへ二足エ、コレ立のじやわいのうソレ 櫻「エ、是はしたりうか／＼せずと能う覺ねたり扱三度目をついでソレ又髯君へ○エ、是はしたり酒がこぼれるわいのうエ、テモマア不器用な女子じやのう「ト突放す」 紅「ア、申々櫻の局殿其様にあなたの様に氣短かうしては覺ねにくうムり升ドレ／＼わしが代つて教てやり升せうサア／＼此銚子を斯う持てソレそちの目で四分こちらの目で四分合して目八分に斯う持て疊の縁を踏まぬ様にすり足で跡へ下るのじやエ、つゝとモウそりや盗人足じやがの「ト又突飛す」 梅「テモマア不調法な者じやのう夫では髯様は拜されぬぞや 松「ちつとはマア土性骨に入てよう覺やいのう○是としたり又泣くのかいのう 竹「エ、又しても／＼吼面夫では目出度の座敷へは出られぬぞやサア／＼涙も拭いて下におやちんと座りやエ、モウ言ふ様になりやいのう 櫻「扱マア跡は乱酒じや諺ひ物を諷はねばならぬぞや

三「其諺とやらは 紅「ハッツイ四海浪でも 皆々、諷やいのう 三「じやてゝそんな事が 梅「諺ひ諷ふ事はいやかそつちがいやならこつちも髯様を拜す事はマアいやじや／＼ 三「何のいやと申升せう 皆々、そんなら諷や 洋「せき立られ」とか三輪色々思入有て」 三「エ、ツ、トモウの千秋万歳のち○は○この「ト泣く」 洋「玉の血の涙聲つまらせてないじやくり 皆々、ホ、コリヤ哀に目出度出来升た 櫻「サア／＼是から色直しにはんなりといつそ梅ヶ枝か露組でも聞升せうか 杉「そりやよい思付でムり升わいのいつそ長歌でもようムり升 皆々、サア／＼聞たい所望じやく 三「エ、有られもない事仰有り升せ山家育ちの藪鶯ホウ法華經も片言交り長歌の露組のとは夢にも聞た事もムり升せん登り下りの仇口や馬士の歌なら聞ても居り升せうがモウ／＼そんな事は免るしなされてどうぞマア其髯様よ 皆々、サア拜み度ばちやつと諷や 三「そんな事は存升せぬ程にどうぞ 竹「サアそんならいやじやといやるのじやなア 杉「イヤ申今申した事お聞なされ升たか登り下りの馬士歌とやらあなた方お聞なされた事がムり升かへ 梅「本にコリヤ氣が替つてようムり升せう私等はまだ聞た事がムり升せぬわいの 松「チ、コリヤ面白うムり升せうわいの 櫻「いつそ其馬士歌とやらと諷はし升らじやムり升せんか 三「エ、滅相な私しやそんな事が 紅「それでも今そなた馬士歌は知つて居るといやつたじやないかいのう 梅「それ／＼たつた今そなたの口からいやつ



たじやないかいつそ次手に身振りも立てしや 松「サア」其馬士歌とやらを 皆々「所望じや」  
 やく 三「エ、モウそんな耻らしい事が 竹「ア」いやいやと申升るいやと有ればノウ皆さん  
 杉「それ」どうで婿は明升まいこんな所に長居せずと奥へ行うじやムリ升せんや 紅  
 それがようムリ升る併かし其女子其處に置いておいたらば御君の御祝言の時こんな事せうや  
 ら知れ升せぬぞへ 梅「本にコリヤよう氣が付升たサア」いやく 皆々「エ、いにや」  
 のう「ト引立るお三輪泣てゐて」三「サア何のいやと申升せう諷ひ升わいなア 櫻「ろんなら  
 諷やるかや 三「アイ」ト立上りこなし有てあ」 淨「諷ひ升ると泣く」も涙に絞る振袖は  
 鞭よ手綱よ立上り 明「竹にサ雀はなア品よく留るナ留てサ留らぬナア 三「色の 明「色の道  
 かいなア 三「エ、愛なはてつばらめがと此様に「ト泣く」 淨「申升ると打伏せば 皆々「ハ  
 、、、 櫻「コリヤさつい嗜事じやのう 紅「イヤモウ今のはてつばらでこちら迄がはてつば  
 らが燃れ升たわいの 梅「中々面白いよい樂でムリ升た 松「イヤモウ近年の鬱散でムリ升た  
 皆々「馬士殿太義 淨「馬士殿太義といひ捨て行を驚き 三「ア、コレ申私も俱々に 櫻「エ、滅  
 相なるなたの様な者を奥へ通す事はならぬわいのう 淨「振離されてがわとこけ寐ながら裾  
 にしがみ付引づられて聲を上げ「ト行かうとするを又引止めて」三「ア、コレ申そりやお情  
 ないぞうぞ私も御一所に 紅「エ、 淨「お慈悲」くと手を合せ拜み廻るを叩き退け 紅「エ、

しつゝい連も及の戀争ひ 梅「それ」お姫様と張合ふとは叶てぬ事じやわいのう 松「モ  
 ウ」こんな女子は一度がせうじやいつを驥をしてやり升せうか 皆々「コリヤようムリ升  
 るわいなア 淨「大膽女の驥をせうと耳を引くやら脇明より手を差入れてこそぐるやらつめ  
 りつ叩いつ突倒し」ト皆々寄て色々さいあみ」竹「サア」是でお姫様の恪氣の名代 杉「邪  
 広は拂ふてさつばりと 櫻「此上は目出度御祝言のお盃 紅「跡は比翼のお床入 梅「こんな目  
 出度い事はないわいの 皆々「サア」行升せうか「ト皆々奥へ行管絃に成御簾一面に捲下  
 るす管絃打上るお三輪は泣き入て居る」 淨「局々へ入る跡は前後正体泣き倒れ暫し消入居  
 たりしが「ト獨吟に成」 明「障子隔て戀の闇かこいといふもつたはれて濕れて手水の水くさ  
 く放れぬ中じや有るまいけれど何のこもなき一ツ夜着 三「ア、思ひ廻せば口惜ひ○とはい  
 ふもの、相手は大勢こつちは一人お公家様じやの上様のと人の贈や繪草紙で見たり聞たり  
 した斗り賤敷此身で只一人來たものじやもの耻づかしめらるゝのも彌ぶらるゝのも皆こつ  
 ちの不調法及ばぬ雲の上人に戀するのは猿猴が月「トお三輪こなし有て花道へ行と御簾の  
 内にて」大勢「三國一じや鉾取りすましたしやしやんのしやんお目出度う 淨「お三輪は屹と  
 振返り 三「チエ、口惜やなア地下に産れた身を悔み思切ても切られぬ輪廻二世迄もと言交  
 はしたる殿御を寐取られました其上に耻かゝされ是が思ひ諦らめられうぞ何とふめ」往な



れうぞ○飽も飽かれもせぬ中を見替へられたは此家の女○それに付ても聞え升せぬの求女  
 様あんまりつれない胴慾な思へばく腹の立エ、ユレ妬ましいチエ、口惜しひわいなア○  
 舞袖も袂も喰裂きく乱れ心の乱髪口に喰しめ聲震はし 三「かのれかめく寝さそうかチ  
 、さうじや 舞「姿心も荒々敷駈行向ふへ以前の使者 舞「コリヤ待て女 三「イヤ爰放しや  
 く 舞「放しやくと身をもがく髻搦んで氷の刃脇腹ぐつと刺通せばうんと仰けに倒れ伏  
 す刀突捨て邊りを窺ひ目を配る奥は豊か又音楽の調子も「ト管絃に成る」 舞「秋の哀れなる  
 か三輪はむつくと起返り 三「扱はそちも姫が言付よなエ、口惜ひ科も無い身を酷たらしい  
 胴慾な恨みはこつちに有ものを却つてそちから殺すことチエ、恐ろしい鬼よ蛇よ殺さば殺  
 るせ一念の生かひり死替り付纏ふて此恨み晴さいで置うか 舞「思ひ知れやと奥の方睨み詰  
 たる眼尻も叫ぶ聲音も上枯れてさも忌は敷き其有様じろりと見やり 舞「女悦べそれでこそ  
 適高家の北の方そちが命を捨し故思ふか方の手柄と成り入鹿を亡す一ツの手立 三「何賤し  
 い此身を北の方とはへ 舞「ホ、ウ不審は尤そちがたらひ申せし御方こそ忝くも中臣の長  
 男藤原の淡海公 三「エ、○シテ又私が死るのがいとしいか方の手柄と成て入鹿を亡す手立  
 とはへ 舞「ホ、、其譯語らんよつと聞け「トのりに成り」 舞「彼が父たる蘇我の蝦夷論ひ  
 傾く頃迄も一子なきを是愁ひ時の博士に占せ白き女鹿の生血を取母に與へし其驗すこやか

なる男子出生鹿の生血胎内に入るを以て入鹿と名く去に依て彼奴が心を蕩かすよは爪黒の  
 鹿の血汐と疑着の相有る女の生血是を混じてコレくく此笛に漉きかけて調ふる時は  
 實秋鹿の妻乞如く自然と鹿の性質顯れ音色を感じて正体無玄 舞「其虚を計つて寶篋を過ち  
 なく奪ひ返さん 舞「鎌足公の御計略 舞「物影を窺ひ見るに疑着の相有る汝成れば不便なが  
 らも手に掛けし 舞「と件の笛の六穴にたばしる血汐受注ぎく 舞「今こそ揃ふ此幻術此笛  
 こそは入鹿を挫じく火串をらんハ、ハツくく 舞「有難やと押戴き勇立たる其骨柄實藤  
 原の御内にて金輪五郎今國と鍛に鍛し忠臣なり 三「ノウ冥加なや勿体なやさうしたか方と  
 しばしでも枕交はした身の果報あなたのお爲になる事なら此身は死でも厭ひ升せぬ 舞「と  
 はいふもの、今一度どうぞお顔が拜みたい仮令此世の縁は薄くとも未來に添ふて玉はれど  
 這廻る手に苧環の手向の糸も七夕の星に契の契たる此主様には逢れぬかどうぞ尋ねて求女  
 様 三「モウ目が見ぬ懐かしい 舞「戀しくといひ死に思ひの玉の糸きれし苧環塚と今の  
 世迄も鳴響たる横笛堂の因縁かくと哀なり今國不便彌増してせめて葬得させんと脊にか三  
 輪か亡骸を追ひく馳來るあらし共 舞「そりや「トばらくと長柄にて取巻」 舞「捕手大せい  
 動くさ 舞「曲者やらぬと取巻たり見向もやらす悠々と几帳の綾絹引ちぎり死骸と俱に我五  
 休くるく確と引結び 舞「ヤア面倒な蠅虫めら死人を取置く我等こそまづ出來合の坊主役



十念授けてこそそうにも一人くひ邪廣くさい一度にさづけてこそすのがそつちの爲には  
百年め 逢「イヤ來いヤツと力士立捕手」さういふうぬから覺悟ひろげ「ト是方大太鼓入賑や  
かな鳴物に成りて色々立廻り急度見得に成てよろしく恭

脚演 妹脊山婦女庭訓 大尾

明治廿七年九月九日印刷  
明治廿七年九月十五日發行

(定價金十三錢)

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷

兼著作者  
兼發行者

中西貞行

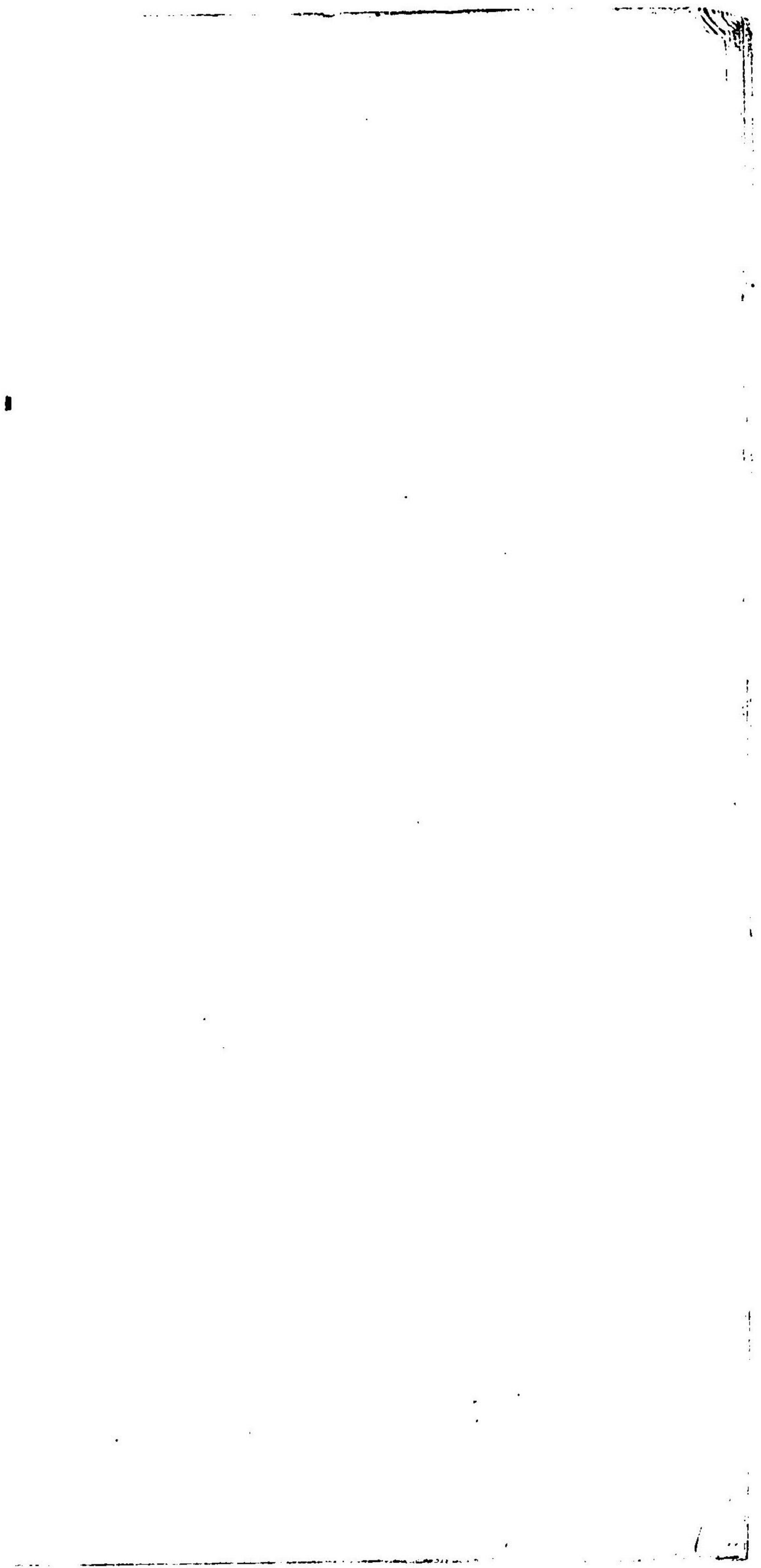
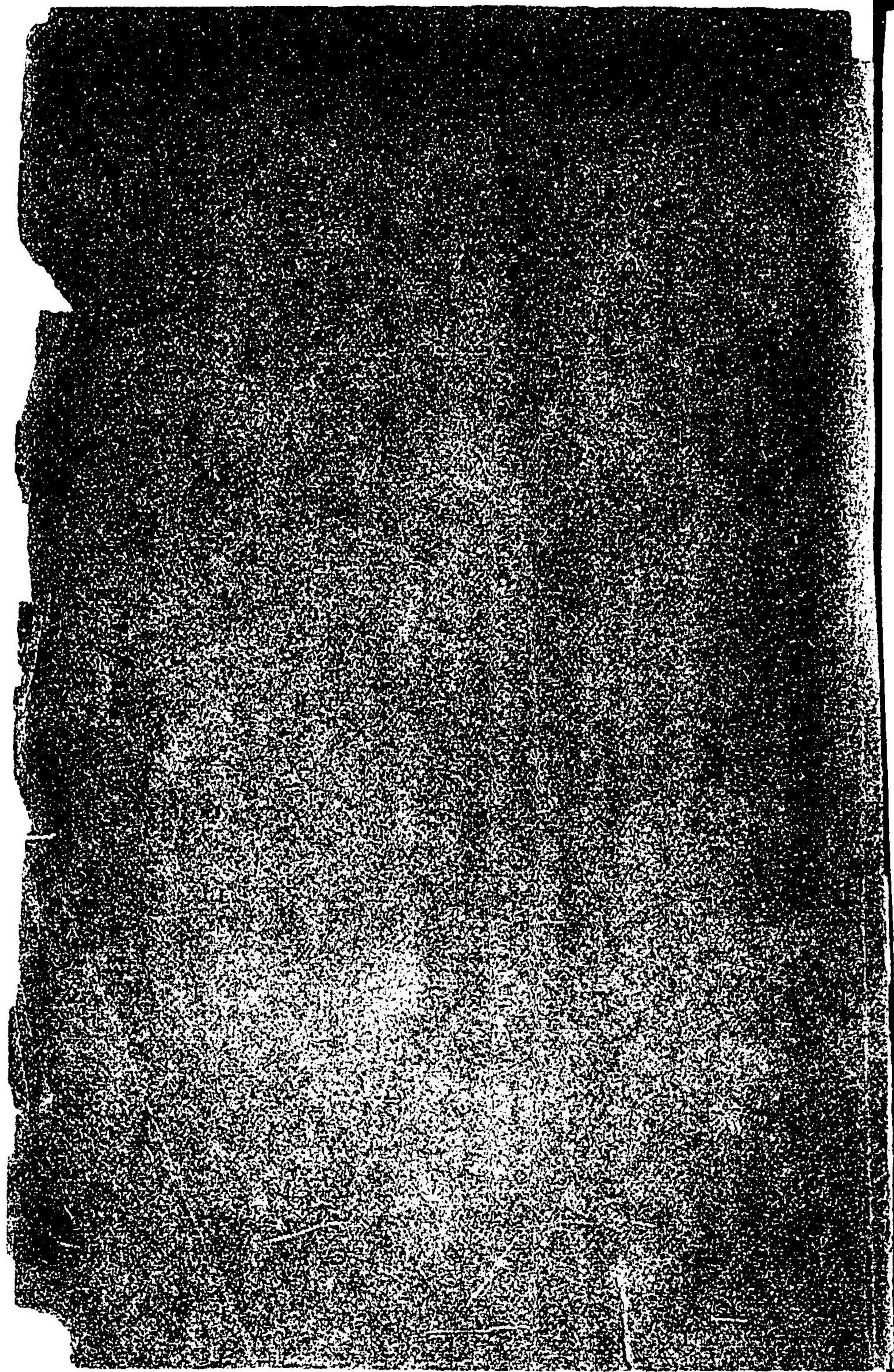
大阪市東區内本町橋詰町六十八番屋敷  
周敏社

印刷者

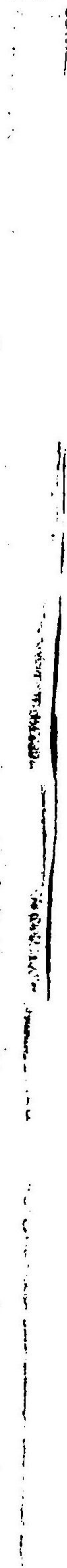
前田菊松

版 及 行 所  
權 興 權 有











特 11

625

088407-000-4

特11-625

妹脊山婦女庭訓

中西 貞行/著

M27

DBJ-0033

